
パラダイス・パラノイア

Reisin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラダイス・パラノイア

【Nコード】

N3120J

【作者名】

Reisin

【あらすじ】

私は今、命を狙われています——。腕利きの傭兵、ベインの前に現れた貴族然とした少女は、頬を紅潮させながらそう告げた。何やら厄介ごとに巻き込まれているらしい。護衛なんて自分の仕事じゃないと鼻で笑うベインに、しかし少女は首を横に振り、声を震わせながら静かに告げた。「貴方をお願いしたいのは護衛ではありません。私は貴方に——貴方に、帝国を滅ぼして欲しいのです……」

プロローグ

なあ、あんた。

こいつはひどく馬鹿げた話だ。

どうしようもなく滑稽で、愚かで、喜劇じみた悲劇の話だ。救いが全くないとも言い切れないが、聞いて気分の良くなる話でも、何かが満たされるような話でもない。俺があんたならまずここで席を立つだろうよ。こいつはそういう話だ。

俺の仕事？

ああ、もちろん違う。吟遊詩人なんてしゃれたもんでもなけりや、老若男女問わず聞き手を虜にするような物語屋でもない。大体、こんな四十近い小汚いおっさんがそんなのだったらあんた、世間に申し訳が立たねえだろ？ 違うか？

まあ、あれだ。

俺は腰のこいつ一つで生きてきた。戦の臭いを聞きつけりや足早に駆けていき、どっち側かなんて関係なく首だの腕だのを切り飛ばす。馬に乗ってるやつとかな、良く狙ったもんだよ。それで騒々しいのが治まり、地面に立つてる野郎の方が少なくなった頃に、出来るだけ立派に見える首を持てるだけ担いで勝った大将のところに馳せ参じるわけさ。さあ、金寄せせてな。

そう。そうだ。

俺は傭兵だ。

争いごとに群がる醜い蠅の一匹だ。己の欲のためだけに平気で他者の命を奪う、クズとかカスとか呼ばれるそういう奴だよ。あんたと何一つ変わらないんだよ、だからそういう顔をするな。

……何？

自分は傭兵じゃないから違う……？

おいおい。

あんたが何者かは俺は知らんがね。あんただって飯を食い、土の

上を歩くんだろう？　だったらそりゃあ俺と同じ、くそつたれの人だ。生きるって事はくそつたれになるって、そういう事じゃねえのか？　あんたはあれだ、俺にそういう顔をするって事はな、鏡に向かつて唾を吐いているようなもんだ。それとも何か？　鶏だの豚だの、草だの虫だのよりも、人間様の方が偉いって、そう思っているのか――？

はは。

こりゃあ驚いた。驚いたぜ。

……ん？　いやな。？その話？を聞くために俺の前に来るのは、別にあんたが初めてじゃねえんだよ。そして今までの誰一人として俺の話を最後まで聞けた奴はいねえんだ。半分は俺の顔を見た時点で引き返し、残りの半分は俺が五分も話さないうちに席を立つ。ぶちぎれて、だ。ぶちぎれて、だよ。中には銃だの剣だのを俺に向けた奴もいる。まあ、そいつらがどうなったかは話さなくても解るだろ？　ここまで案内される間に聞かなかったか？　？黒の席へお越しですか？ってな。

ははは。

安心しな。その椅子は三日前に替えたばかりだ。耳だの目玉だのはこびり付いてねえよ。

ああ。いい顔だ。

そついう顔の奴にこそ、俺も安心して話せるもんさ。従順な生徒はよろしくない。なめたガキもよろしくない。授業はちゃんと出席するが、教師の話をちくいち疑う奴が相応しい。じゃなきゃ、何が何だか解らなくなっちまうからな……。

はは、んじゃまあ前置きはこれくらいにして早速授業を始めるとするか。あんまり焦らすと、あんたはその椅子を立つか、あるいはその椅子を黒く染めるペンキになっちまうだろうからな。俺もそんなのは別に望んじやいないしな。本当だぜ？　俺が今まで殺して来たくそつたれに誓うぜ。くく、疑ってるな。そう、それで良い。俺は嘘つきで、嘘つきじゃない。それを忘れるな……。

あれはそう、十年前ほど前の話だ。俺はちょうどどこと似たような酒場で、ウェイトレスの尻を撫でながら馬のションベンのように温い酒を腹の底に流し込んでいた。

そこに一人の女がやってきた。この話の全ては、その女の悲鳴から始まった――。

第一話

悲鳴つてのは、俺にしてみれば割となじみのものだ。

教会の青白い神父と説教、がりがりの娼婦と喘ぎ声。

そんな感じさ。

朝から晩までとは言わないが、目開けている時間の大半に耳にする、有り触れた類のものだ。

まあもちろん、懺悔してえ野郎が来なけりや神父も説教できないし、客が来なけりや婆も声は上げられない。俺だって叩ききる奴がいなけりや聞くことは出来ない。

そんな時の俺は二三日前に手に入れた金を相応しい形で消費すべく、不味い酒だの臭え肉だのを貪っていた。だからまあ、悲鳴なんてあんまり聞くような状況じゃなかった事は確かだ。

「——あ？」

ともあれ、聞き慣れたはずのもんだ。

だがそんな時のそいつは、俺が普段耳にしてるやつとは少々毛色の違うもんだった。少々じゃねえか。かなり、だ。天と地ほどかけ離れたもんだった。野郎の断末魔とは馬鹿馬鹿しいくらいに違ったのさ。

「やめなさい！ 手を、離しなさい！」

女の悲鳴だ。

それもガキ臭い、甲高い奴だった。

それだけでさえひどく場違いなもんなのに、加えてその女の声は、育ちの良さがすぐさま解る、えらく滑舌の良い綺麗なもんだった。

俺は声の方を見たよ。俺だけじゃない。酒場にいた全ての人間がそっちを見ていた。

「離しなさい！」

「そう言っなよ。な？ その邪魔な布きれなんて取ってよ、ちよつと顔を見せてくれよ」

「お断りします！ さつさと手を離さない！」

「けちけちすんなよ——」

女は男に絡まれていた。

地味だが上等な布をまいた女の顔は、鼻から下しか見えなかった。まあ、例え全部見えたとしても、俺に心当たりなんてものはありやしない。ガキの顔なんて覚ええないし、帝国の幼い姫様の顔だって知らない。

顔を上げてはみたものの、反射的なもんで興味なんてほとんどないわけだ。俺の視線は女に留まる事はなく、女に絡んでる男の方に向いた。

ああ、こっちは割と知ってる奴だ。

バップっていう俺の同業者だ。いつかの戦場で動かなくなったらしい左腕を、ぶらんぶらんぶら下げてる野郎。汚ねえ見た目からドブネズミの相性で親しまれてるこいつは、無類のガキ好きつつう変態だ。

ガキ好きって解るよな？

そっちの意味だぜ？

性別は気にしない博愛主義者だから、本当に頭が下がる。正直、同じテーブルに座る事があつたら、俺は野郎に強い酒ぶっかけて火をつけるね。きつとあんだだつてそう思うだろうよ。

とにかく、状況が大体理解できたところで、俺は完全に興味を無くした。

驚いたように近くで突っ立ってるウェイトレスの尻を景気よく叩き、そのごつい感触を鼻で笑いながら、手に握ったグラスを口につけた。そのまま一気にそれを呷ろうとしたんだが、

「この中にベイン様はいらっしゃいませんか！ ベイン・グーデル様はいらっしゃいませんか！」

手が止まっちまう。

何も飲んじやいないのに、口の中で苦い味がしたぜ。眉間に寄った皺をグラスを握ってない方の手で撫でながら、俺はテーブルの木目を睨んだよ。神が目の前にいたら力一杯殴りたい気分だったのさ。「グーデル様！　いらっしやいませんか！」

ご存じの通り、ベインってのは俺の名前さ。

ジョージほどじゃないが、別に少なくない名前だ。だからそう、女が呼んでるベインが俺じゃないって事も十分あり得るわけだ。

問題は、だ。

「グーデル様！」

そう、それだ。

グーデルってのは、別に俺の名前じゃない。だが、全く関係がないって名前でもない。

何日か前の事だ。

しつこく俺の素性を聞いてくるやつに姓を聞かれ、咄嗟に適当に作った奴だ。煙に巻くためだぜ？　しつこかったんだよ。だから仕方なく、だ。金輪際耳にするはずがない名前、それがグーデルだったんだ。

「ベイン・グーデル様！　いらっしやい——きゃ！」

パンって響いたそいつは、そっちを見なくても解った。頬をひっぱたくその音だ。おおかたバップの野郎がやかましい女にぶちぎれて、張り倒したんだろ。だがまあ、俺はそれを理解してもやっぱり、神を呪う以上の事をしなくなかった。

「ね、ねえ……ベインってあんたの事じゃないの……？」

顔を上げれば、さつき尻を叩いてやったウェイトレスが責めるような目で俺を見ていた。

俺がどうしたかって？

「違うに決まってるだろうが」

鼻を鳴らして酒を呷ったのさ。

ウェイトレスは顔をしかめたが、俺は全く気にしちやいなかった。厄介ことは誰だってご免だろう？　進んで引き受ける奴は宗教関係

者。つまりは極上のマゾって奴だけだ。

俺は無視した。

それで終わり。終わりのはずだった。

「あ、あなたがベイン様ですか！？」——ベイン様ですね！」

残念。女は地獄耳だった。

明らかに俺に向けられて飛んできた声に顔を引きつらせながら、俺は顔をそっちに向けた。

酒場の入り口、つまり出口だ。

バップのましな方の腕に掴まれ引きずられる女の、その青い二つの瞳が、布の影から射殺さんとはかりに俺を睨んでいたよ。

俺は悟ったね。

そして嘆いたよ。

ほら、厄介ごとに巻き込まれたぞ——ってな。

「離しなさいっ！」

女は……ああ、正直大したもんだった。

細い足を中々の速さで跳ね上げると、バップの股間をつま先で抉ったのさ。

すぐさま酒場に響いた悲鳴は、馴染み深いやつだった。

それをかき消すように足音を立てながら、真っ直ぐに俺に向かって走ってきたそいつは、酒だの肉だのの乗った俺のテーブルをバンと強く叩くと、鼻息荒く名乗りを上げた。

「私はフィオナ・セリアード！ 貴方にご依頼したいことがあって参りました——」

頭に乗った布きれが、その勢いに負けて滑り落ちた。その時の事は今も頭に焼き付いてるよ。
なぜかって？

それは布の下から現れた女の長い髪の毛がな……………

血のようにとっても赤かったからさ。

第二話

「ご依頼とか言われてもな……」

その赤毛から目を逸らして、俺はため息をついたわけだ。一発で酸欠になりそうなやつさ。その時の俺が最高とは言い難い気分だった事は、きつとあんたにだって解ると思う。

「まずはお話を聞いてください」

食い下がる女が面倒くさい？

ああ、いや。それはもちろんそうだ。

何しろ俺をグーデルと呼んだんだ。それだけで誰の関係者が解るつてもんだ。

だがな、赤毛の女よりも先によ。

「———こ、のクソアマが………！」

こいつだよこいつ。

女の後ろに立つ男。顔を腐りかけのトマトみてえにしたバツプだ。野郎、寂しい頭の天辺から尻の毛に至るまで怒りに支配されているらしく、女しか目に入ってなかった。

俺の事なんて眼中にない。

有り難い事だ。

何しろ奴に話しかけられるって事はつまり、奴の下水溝よりひどい息を顔に浴びせられるって事だ。

ひよつとしたらガチで死ぬんじゃないか？

まあとにかく、その危険はないわけだ。奴は俺の事なんて見向きもしていないわけだし、

「あら貴方。まだいたんですか」

赤毛をふわりとたなびかせ、バツプを振り向いた女。

ああ、嫌な予感がしたぜ。

「申し訳ありませんが、ベイン様とお話ししてる最中です。お話が終わった後も、貴方と話す意志も時間もございませんので、どうぞ

「お引き取りください」

当たりだ。

当たったのに嬉しくねえ。

最高のため息ってやつをつくために深く息を吸い込んだところで、バップの首に乗ったトマトが先に弾けちゃった。

「……皮を剥ぎながら犯してやる——」

馬鹿げた話だな。

俺にはバツプのその押し殺した声がよ、処女が初恋の男に恥じらいながら告白するような風に聞こえたんだ。

途端に頭にそれが思い浮かんだ。

可愛らしいピンク色のエプロンドレスを着たバップの姿だ。頭には特大のリボン、顔には下手くそな最悪の化粧だ。手をナニの前でもじもじさせながら、けばい色のルージュを引いた唇をぱくぱくさせてんだ。

ちゅきでちゅ——つてな。

「あははははははははははは！」

最高だった。

最低だった。

そして最悪だったわけだ。

「テメエ——ベイン……」

野郎の両目が始めて俺を見た。

そして何よりあれだ。

死ぬほど臭かった。

「臭……！」

いけねえ。

声に出しちゃった。

でもあれだ。仕方ねえよ。だって本当に臭いんだぜ？

俺は久しぶりに故郷の便所の臭いを思い出したね。
すげえんだ。

親父が卒倒した事だつてあんだぜ？

寝ぼけてたらしくてな、鼻を使わず口で息をしなきゃならん事を忘れてたんだ。

親父はしばらく家に入れてもらえなかったよ。

「先ほどから私も思っていましたたが、確かにひどい臭いですね。ひよつとしてご病気何かですか？」

赤毛の女が俺の言葉に頷き、鼻を覆いながら心配そうに尋ねた。
さあ問題だ。

日曜学校の道德の授業風に言うところだ。

——そう言われてバップ君はどのような気分になったでしょう
か……？」

「

答えはカンタン。

言葉が出ないほどにカンカンになりましたとき。

え？

喋らない代わりに何をしたかって？

そりゃもちろんあれだ。

「……貴方。剣なんか引き抜いて、一体どういふつもりですか」

女の質問。

それだけ聞けば、女がどうしようもない馬鹿だって事になるが、
どうやら馬鹿は馬鹿でも物の解る馬鹿だったらしい。野郎が剣の柄
に手を伸ばした時点でさつと飛び退き、うまい具合に椅子に座る俺
の後ろに回り込んだのよ。

「おいおい。挑発だけしといて後は人任せってのはいただけねえな。
自分でカタつけるよ」

試しに首をひねって説教をくれてみるが、

「挑発はしておりません。あちらが勝手に勘違いされただけです。
危険を感じたのでそれを回避するべく行動を取っただけです」

「……そうかい」

毅然と言い返されちゃあ、ため息しかつけねえ。

まあ言いたいことは山ほどあるが、バップはじりじりこっちに寄

つてきてるし、奴を怒らせた責任の一部は俺にもあるわけだ。

「仕方ねえなあ……」

何とかしねえと。

つってもその？何とか？つて奴を俺は二つしか知らないんだよな。

一、説得。

んー何だ。無理じゃないか？

バップ、お前全然臭くないよ、せいぜい豚小屋くらしが臭わねえよ……とか言ったところで聞くわけないし、解ると思うが俺も口が上手い方じゃない。後ろの女は論外、火に火薬だ。バップも泣いちまうかも知れん。

第一、奴は完全にきれているかも知れんが、冷静さは失っちゃいないんだ。怒りのままに俺に飛びかかったりせず、間合いを少しずつ殺しながらこちらの隙をうかがっているんだからな。冷静にきれる——冷静に殺そうとしているわけだ。既に腹をくくってる。

説得は無理。

ならやつぱり、もう一つしかない。

「戦うのですか——」

「まあな」

ちらりと顔を上げれば、女が真剣な顔で俺を見ていた。

俺は驚いたぜ。

何しろ女の青い瞳は怯えなんてものとは無縁で、好奇心でいっぱいだったのさ。

好奇心つつても、毛が生えかけのガキが武器だの殺し合いだのに抱くような、奇妙なきらきらした幻想じゃねえぞ？

女のそれは例えるなら獣の涎だ。

一週間ぶりの獲物を目の前にした肉食獣だ。べたべた視線でそれを見つめながら、やがて頬張る事が出来るだろう血と肉の味に喉をゴクリと鳴らす獅子の色だ。

何より不気味なのが、興奮に支配されながらも、そのくせ氷のように冷徹な理性を奥の方にしっかり忍ばせてやがるところだ。

さっぱりした事実だ。

俺はそれを手に入れた。

剣片手ににじり寄ってくるバップよりも、ちょっと強く抱きしめただけで壊れそうな背後の女の方が——やばい。

「立ち上がって剣を抜かないと。もうすぐそこですよ」

俺はため息をついたよ。

女がこの酒場にやってきてから何度目かな。あんた数えてるか？まあとにかく、俺はため息をついてやれやれと首を横にふった。首のついでに手首も振った。

「え——あ………」

女の呆然とした声を聞きながら、俺は空っぽになった左手で皿から肉を拾い上げた。そのまま口に放り込み、油でべとべとした指を親指から順に舐め上げた。

下品？

フォークを使え？

まあ俺は確かに上品とは言いがたいし、どちらかと言えば下品な部類に入るだろうよ。

でもよ、食事くらいは人らしくナイフとフォークを使うぜ？

ただ、そういった道具がない時は素手で驚掴みだ。

つまりそういう事だ。

「へえ………」

藁でこさえたみたいなものやもしやした肉を何とか飲み干した頃に、後ろで女が何度か頷く気配がした。

「不足はないようだわ——」

ちらりと女の顔を盗み見ると、女の瞳はじっとバップを——その眉間にフォークを生やした男の死体を見つめていた。

例の涎まみれの瞳で、だ。

「……取りあえず話だけは聞いてやるから、そこに座れ」俺は口の中だけで舌打ちをして、自分の正面を指さした。解るだろ？

いや、解らないか？

俺だけが解ったのか？

「有り難うございます」

可憐としか言えない笑顔を浮かべ、優雅な仕草で椅子に腰掛けた女。

こいつはきつと狂ってる——俺はその時、確かにそう思ったんだよ。

第三話

話し合いの基本って知ってるか。

目を見て話す？

ああ、それも悪くはねえが、そいつは最悪の状況の引き金になる場合もあるんだよ。目は口ほどにものを言うつてやつ。腹の底を読めるやつは実際のところ、結構いるんだ。かくいう俺もその一人さ。笑顔……ねえ。

そいつもどうだろうな。

好印象を持つてくれるやつもいるんだろうが、俺の知り合いには少ないな。目の前でヘラヘラだかニヤニヤだかニコニコだかされれば、俺なら気分を害すぜ。野郎、薬でもきめてんのかつてさ。

まあ、あんたの身につけた交渉術は置いといて、だ。

おっと。

そんなに怒るなよ。別に俺はあんたを軽んじたわけじゃないんだ。ただ聞いてみたかったのさ。

何しろこういう他人に対する？構え？つてやつは詰まるところ、自分に対してどう接しているかってのを現しているんだからな。はは。

神妙な面しやがって。テキトーだよテキトー！ 今考えついただけだ。深淵な意味があるわけじゃねえよ。あんたも案外素直なやつだなあ、くくく。

俺の場合、だ。

テメエとヤロウに対してどう接するか、だが。

「お前、ビジュテルンの関係者だな——？」

目に力を込め睨み、声にはどすをきかせる。

威圧による先手必勝。

小物ならこれで大抵どうにかなるぜ？ 最も、この演技も上手くやらなきゃあガキのツツパリだ。使いこなしたいなら羊か豚相手に

練習してな。そうすりゃあんたは誰もが怖れる存在になれる。まあ最も、違う意味でびびられるわけだが。

とにかく、俺はそいつをお見舞いしてやった。もちろん目の前の赤毛にだ。

ところがこの女、やはり小物じゃなかったらしい。

「はい。ビジュテルンはセリアード家の、遠縁の親戚になります。貴方のお話を聞かせてくれたのはディアヒムのおじ様です。先の盗賊狩りでご活躍された、と」

「……あー、そうかい」

すらすらと喋ったあげく、あの嘘くさい可憐な笑みすら余裕で顔に浮かべて見せた。

やってらんねえ。

「まあ、要するにお前。貴族なわけか」

「はい。そうです」

違和感はない。

平民が一生働いても上着一つ、いや下着一つ買えないだろう女の服装は、派手じゃないが明らかに金のかかった代物だった。しゃべり方もそうだ。気持ち悪いくらいにはきはきしてやがる。

セリアード家ってのは聞いたことないが、俺が覚えている貴族は例のビジュテルンと知り合いのクソアマのところ、後は王家くらいだ。ああ、王家は貴族とは呼ばないんだっけか？ まあ良いか。俺には関係のない話だ。

……ディアヒムか。

名前を聞いたただけであの爽やか笑顔が頭に浮かんで来やがる。やつはあんたと同じタイプ、いや、あんたよりも一枚上手だろうな。話さない時も寝ている時も、にこにこ笑ってやがったからな……正直さ、盗賊よりもあいつの方が怖かったんだ、俺。

盗賊か。

まあ治安が落ち着いた今じゃ、あまり馴染みのないものなのかもな。だがそんな時は帝国と連合国の戦の最中、賊と名のつくものは魚

屋の魚の数よりも多かったわけだ。

鈍い反応だな。

言っておくがよ、盗賊つっても素人じゃねえんだぞ。脱走軍人だの傭兵のアルバイトとかだ。大陸最強と謳われた帝国に潰された数々の小国、そのらの連中が徒党を組んで復讐込みの凶行を重ねてたのさ。やつらは武器の扱いに長け、集団戦闘もこなせた。モチベーションが高いから、下手したら田舎の国境警備隊よりも強かったりする。

もちろん正規軍を使えば一発だ。練度は異常としか呼べないし、数も物資も段違い。当たり前の話だよな、国対群れの図式なわけだから。

だが、だ。

役人どもは正規軍は動かしたくない。

帝国がいくら強いつつても、敵の数が尋常じゃない。軽々しく軍を動かせば、いつ隙を突かれるか解ったもんじゃないからだ。それに金をかけて育てた兵士を要らぬ危険に晒したくはないってわけさ。そこだ俺たちの出番さ。

奴隷の次に命の安い傭兵ども。戦争がある限り決していなくなったりしねえからな、いくらでも消費できる。役人どもが夕飯のワイン一杯を我慢する必要すらない。せいぜいつまみ一切れ分なんだ、俺たちの価値ってやつはよ。

傭兵による盗賊殲滅戦の一つ。

ちよつと前にあったそいつに俺は参加した。そこで傭兵どもを取り仕切る役人の一人がディアヒムだったわけさ。

「おじ様の話では鬼神のごとき剣さばきだったとか。一人で二十人は倒したと聞きましたわ」

「それはやつの妄想だ。盗賊は四五人しか殺してねえよ」

小遣い稼ぎに参加したんだ、体力使うのも馬鹿らしい。そう考えた俺はしばらく茂みでぼうつと空を眺めた後、疲労していた敵味方の背中に飛びかかっただけ。

……ん？ ああそう、後の十五人だけは味方だったよ。

「正直、私も最初はそう思いました」

「へえ？」

「おじ様は素晴らしい方ですが、子供っぽいところもありますので、きつと初めての戦闘で興奮されたのだろう、と」

「……まあ、その通りだな」

ナニも勃ってんじゃねえのかってくらいだった。気持ち悪くて危うく殺しかけたつてのは、俺とあんなだけの秘密だぜ？

「貴方の腕については半信半疑、いえ、失礼ですがほとんど信用していませんでした」

「過去形じゃなくても良いぜ？ 現在形でもそいつは真実だ」

「ですが、実際にお会いしてみても考えを改めました。おじ様は正しかった、と」

ちやかしてみるが、女はそれをまるで無視しやがった。じつと青い瞳で俺を見上げてきたよ。

おいおい、次にポケットから取り出すのは指輪かって、まあそんな熱い視線さ。

「私は今、命を狙われています」

「——は？」

耳と頭を疑ったぜ。

俺の自慢のその二つを、だ。

「敵は強大な暗殺組織。その刺客の腕前は恐ろしいもので、誰も暗殺だとは気づかないほどのなのです」

更に女の頭とその口を、だ。

「……冗談か？」

笑えないけど。

「いいえ、冗談ではありません。事実です」

笑いたいぜ。

でもまあ無理だった。

何しろ相手は狂人——何をしでかすか解らない。刺激しちゃあ

まずいだろ？

色々な事を考えたよ。

蝶よ花よと育てられた貴族の令嬢が、愛する父親が女装して部屋で美少年を犯してるのを見ちまったとか。継母の折檻が度を超してたとか、転んで頭を打ったとか。

理由がどうであれ、まあここは一つ話を合わせておこう。

腰抜けとか言うな。

相手は貴族様だぞ？　ゴマするのが平民の仕事つてもんだろ。

「そうか……衛兵を呼んだら良いんじゃないかい？」

いけね。変なしゃべり方になっちまった。

「いえ。それは駄目です。もし衛兵が私を守ってくれたとしても、今度はその衛兵が彼らに殺されるだけです。家族を人質に取るかも知れませんし」

「そう……それはまずいね」

「はい」

おいおい。

いきなり露骨になって来やがったなあ。そういう恥ずかしい部分は隠すべきだぞお嬢さん。はしたないなあ。

……ふむ。

ではこうしよう。俺が力になれない理由つてのを、いくつか教えて差し上げたら良いんじゃないか？　もちろん嘘八百だ。

名案に思えた。

思い立ったが吉日。俺は表情を暗くした。

「——力になってやりたいのはやまやまなんだが、な。悪いが俺も国に嫁と子供がいて、あまり危険な仕事は引き受けられないんだ。俺が死んだら嫁は身を売るしか生きる道がなくなるだろうし——」

悲しげな笑みだ。

ほらあれだよ。己の力不足を嘆く男が浮かべる、目にするだけで胸をかきむしられるような自嘲の笑みだ。

俺は演技派だ。

これくらい難なくこなせる。自信があつたぜ、もちろん。

……だが。

だが、だ。

運悪くその時、デブの酔っぱらいが転がるバップの死体に躓き――

――床を何度かバウンドしやがつたんだ。

ぶよんぶよん。

俺は見ちまった。そして音も聞いた気がしたんだ。

「だから悪いがあんたの護衛は出来ないんだッ」

悲しげな笑み……？

ああ失敗さ。

笑いを必死に堪えている男が鼻で笑っただけだ。かきむしられるのはむしろ、胸じゃなくて鼻先だったんじゃないかな。俺が女なら間違いなくきれてただろう。

「ああ、そうじゃありません。誤解させてしまったようですね」

だが女は落ち着いた顔で首を横に振った。赤毛がその後を追って宙をひらひら。風に揺れる花みたいだったよ。綺麗な綺麗な赤い花だ。

だがまあ、

「貴方をお願いしたいのは護衛ではありません。私は貴方に……」

花は花でも棘だらけの毒だらけ。

眺める分には良いだろう。

だけど触れるのはあんた命取り。

何触れた？

それじゃあんたはもうおしまい。

「貴方に、帝国を滅ぼして欲しいのです」

醒めぬ悪夢をご覧あれ――。

なあ、あんた。

もしこの世に神ってやつがいたとしたらよ。
俺とこいつの一体どちらを救うんだ……？

第四話

「ま、待つてください。どこに行かれるのですか——！」
人生つてやつはな、あんだ。

当然の話だが限りがあるんだ。一秒後か十年後かは知らねえが、いつかは人間死んじまう。病気だの事故だの事件だの、じゃなくても寿命の野郎がゴールに待ち受けてるんだ。

だからこそ楽しいんだがな。

散らねえ花の美しさつてやつは俺には解らんしよ。

「ま、待つてください！　お願いします！」
詰まるところ。

俺のやるべき事つてのは簡単だ。単純な話だよ。

限られた時間をよろしく生きる。

有り触れた言葉だろ？

でもまあ、真理つてやつさ。

天国とかいう家畜小屋を信じてる阿呆どもよりはよっぽどマシだと思わないか。連中はクソつたれたテメエを誤魔化すために、与えられた試練だの何だの嘯いて惰性で日々を過ごすんだ。

この貴重な一瞬を祈りにあてるんだぜ？

死神みてえなひでえ面した女を買って、そいつに病気を移される方がまだ有意義に見えてくる。例えその家畜小屋が確かに存在したとしても、だ。ここで全力で生きられない奴らがどうしてそこで幸せになれるんだ？

「待つて——！」

おつと話がそれたな。

あの阿呆どもの話になると、ついつい熱が入っちゃうんだ。

まあ、なんだ。

時間は貴重だつて事だ。あ？　それはもう聞いたつて？

気が短い野郎だな。さてはあんだ、ベッドの上でも独走してさっ

さとゴールしちまうタイプだろ？

だからさ。例の赤毛の女ってのは、貴重な時間を無駄にしちまう厄介事なわけ。そんなわけで俺は女の？世迷い事？を耳にするとすぐに席を立ったのさ。硬貨を数枚テーブルに叩きつけ、あっという間に酒場を後にした。

鮮やかなもんさ。

脱兎よりも俺の方が脚が速かったに違いない。十点満点のうち九点をつけても良い。俺の一連の動きはそれくらいの出来だった。

だがまあ。

「待ちなさい——！」

追っ手は狐よりもしぶとかつたらしい。

早足で歩く俺の正面に回り込んだ赤毛が、肩で息をしながら睨んできやがった。

「いきなり何も言わずに立ち去ろうとするなんて、あまりにも失礼じゃありませんか！」

俺は気にせず、斜めに避けて再び歩き出そうとした。

「待ちなさいと言ってるでしょう！？」

女、俺の腕を掴みやがる。

反射的にそれを振り払おうとしたが、俺はふと考えた。

こいつ。例え今日追い払えたとしても、明日は明日で俺を追いかけてくるんじゃないかねえか——ってな。

恐ろしい想像だ。

泣きぼくろが色つばい巨乳の未亡人ならともかく、相手は赤毛のガキ、それも貧乳だ。悟りでも開いちまったらどうするんだよ。

仕方なく赤毛を正面に捉える。

「……はあ」

「ようやく口を開く気になりましたか。それじゃあ、話の続きをしましょう」

ふくれっ面。しかし上品さは欠片も損なわれないなんていう離れ業を現在進行形でやる女に、俺は鼻を鳴らして見せた。

「しねえよ」

「——何故ですか。まだ報酬についても一言もお話していないのに。言っておきますが依頼達成のあかつきには、この先働かずとも何不自由なく暮らしているだけの報酬をお支払いします」

「あのなあ。例えあんたがそれだけの金を用意できたとしても、だ。俺はやる気はねえぜ、それ。理由は言わなくてももちろん解るよな？」

「解りません。きつちり説明してください」
眉間に皺を寄せやがる。

細められた青い目は、そりゃあ槍の穂先のように鋭かったさ。
最も、俺はそうだったのは慣れっこだがな。

「依頼内容が不可能だからだよ、お嬢様。帝国を滅ぼすなんて——
ああ、言ってて力が抜けてきたぜ。俺の台詞じゃねえってのに……」
無駄ってやつだ。

大無駄さ。

こういうのはな、それだよそれ。

限られた人生。その貴重な時間をドブ底に投げ込むって事さ。

ありえねえ。

ありえねえだろ。

だったらほら、そういうのとは一刻も早くおさらばだ。下手に理解しようなんてしない方が良いんだ。

無視。

シカトだよ。

なかった事にして脇目もふらず逃げるんだ。

それが道理。

それが賢いって事だ。

賢い俺は女に指を突きつけた。

「俺は受けない。話は終わりだ、お嬢様」

ぺっと唾を吐き捨てて俺は背を向けた。

いつものペースで歩き出す。正直、あーだこーだ言って取りすが

つてくると予想していたが、女は腕を掴むどころか制止の言葉一つかけてくることはなかった。聞こえたのは息を吸い込む音と、ギリギリと歯を食いしばるそれだけだった。

ほっと一安心。

すぐさま俺はやばい女の事を頭から追い出し、帝国の青い空を見ながらこれから何をするかを歩きながら考え始めた。

まだ昼過ぎ、日は高い。酒場に戻る気分でもないし、宿に帰るのも早すぎる。博打もあんまり趣味じゃないし、金は無駄にしたくない。

さて、どうしたものか。

幹旋屋に顔を出して仕事の確認でもしてみるか。もちろんまっとうなやつだ――。

「きやつ――」

そいつは背後からだった。

短い悲鳴だ。

本来ならもつと長かったやつを、途中で無理矢理ぶちぎったような悲鳴だった。

悲鳴。

そう、悲鳴だ。

馴染みがある、それも聞き覚えのあるやつだ。

嫌な予感？

予感どころの話じゃねえ。

ここは大通りであって酒場の中でもなけりやあ、路地裏の暗がりでもないんだ。

白昼堂々。多くの人間が行き交う通りの中で聞くようなもんじゃない。しかも悲鳴の持ち主はガキ。貴族の令嬢だぞ？　どういう状況ならそんなものを聞くことが出来るんだ？

疑問だ。

だが、俺は迷った。振り向いて疑問に答えを得るのを躊躇ったんだ。もちろん、明らかにそいつは厄介事だからだ。しかも遠いどこかにあるようなやつじゃなくて、目の前にあるそれだ。振り向くべきじゃない。

俺は止まった自分の足の、そのつま先を睨みながら小さく頷いた。よし、振り返らずにこのまま歩きだそう……。

と、その時だった。

「人さらいだ——！」

叫び声が耳に届いたのと、すぐ横を一頭の馬が走り抜けていったのはほぼ同時だった。

一瞬だった。

俺が目にする事が出来たのは、ほんの僅かだった。

黒毛の立派な馬。

それを操る帽子を被った男。

そして男の小脇に抱えられた、ぐったりとした小柄の女。そして

赤毛。

気づけば馬の姿は消えていた。

視線の先から人々の悲鳴だけがちらほらと聞こえてくるだけ。全ては一瞬で通り過ぎていった。

あっという間。

だからこそ、妙にくつきりと頭の中に張り付いてしまった。不運だ。

そうとしか言いようがない。

馬の行き先がこちらと反対方向であれば、無視する覚悟を決めた俺はそんなものを見る機会はなかったし、女を攫った野郎が事を起

こすのをもう少しだけ遅くしていれば、俺は女の悲鳴を聞く事なんてなかったんだ。あるいは野郎がもっと早く決断していれば、そもそも女と俺は会うことすらなかった。

これが答えだよ。

クソ忌々しい事実だ。

そいつが向こうから飛び込んで来やがった。ちょうど背を向けたその瞬間に、だ。

神はいるね。

俺は確信したよ。

俺は今そいつに祟られてるんだ。どの時点で目をつけられたかは、心当たりが多すぎて解らないが、ずっとこちらの隙を伺っていたに違いない。じゃなきゃ、こんなに都合が悪い事が立て続けに起こるはずがない。

—— 赤毛に従え。じゃなきゃテメエのカマ掘るぞ。

ああ。

何だろうな。

これが噂に聞く野郎の啓示ってやつか。

厄介事に抗う気力が集められねえ。つつかあれだ。背筋がマジで震えてやがる……。

「……くそっ」

一言だけ毒づいた。

近くに止まっていた馬車にさっと駆け寄り、四頭いたうちの一頭の馬を切り離し、その背に一息で飛び乗った。

「あ、あんた何するんだ!？」

持ち主らしき小太りの男が叫んでくる。

俺はそいつの脂ぎった顔に向けて歯を剥いてやった。

「俺が聞きてえよ馬鹿野郎!」

びびったそいつの顔から視線を引きはがし、正面に向けると馬の

腹を強く蹴った。

すぐさま馬は走り出し、どんどんと速度を上げていく。悲鳴を上げながら飛び退く通行人を視界の端で捉えながら、俺は心でため息をついた。

——もうどうにでもなりやがれ……。

第五話

何はともあれ。

胸の内で疼く熱き良心（齒に衣を着せなければ自暴自棄）に身を任せれば、気は割と楽になった。

こなすべき課題は明確だからだ。

物好きなロリコン野郎に追いつき、そいつをぶちのめし、そして赤毛をぶちのめす。簡単だろ？

あ、いや違った。

赤毛はぶちのめしちゃいけなかった。ん、いけなかったか……？

まあ良い。

取りあえず馬だ馬。

影も形も既に見えないが、野郎の行き先は大体予想がつく。予想に従って俺も馬を走らせりゃ、いずれはやつのケツに追いつくだろう。

何、理由が聞きたい？

はあ。

んな事あんまり重要じゃねえだろ。

まあ俺は寛大だ。

俺の素晴らしい才覚を妬んだ野郎に後ろから刺されそうになった時も、衛兵に突き出したりはしなかったしな。尻に縦笛を突き刺して手足縛って教会の屋根の上に放置しただけさ。屋根の上の気まぐれ楽士は、それはもう寂しげな音色を響かせていたよ。気まぐれにな。

ああ、野郎の行き先だったな。

これはまあ何というか職業柄なんだがな、塀で囲まれた町だの何だの入る時、俺は逃走ルートと避難場所を先に見つけておくんだ。いざって時のためさ。

傭兵の命が軽いつてのは前に話しただろ。俺たちは後ろ盾なんて

ないし、いつ何がどうなるか解らんのだ。長く生きたきや自分の身は自分で守らなきゃならんのさ。

それでここ、帝国の広大な領土の内の一つ、ギホリ……あー、まあ名前は忘れたが、とにかく割と大きな都市なんだ。そんでまあ、つい何年か前まで現役の要塞だったせいで防備は笑っちゃうほどに堅牢でよ、衛兵だのと事を構えずに脱出したけりゃあルートは大まかに言って一つしかないんだよ。

食糧自給率を少しでも上げるために開かれた農地。作業の障害になるって事で、馬鹿高い堀の一部が撤去されてるわけだ。

衛兵はいるにはいるがヨボヨボの爺さんが二三人だけ。

防備が薄いのはもちろん理由がある。山に接してる上に、街道に出るためには毛深い女の股間並みに生い茂る森林地帯を抜けなければならぬからだ。敵対国の兵隊だの盗賊だのが突入を試みるのは厳しい。俺もこの間ちよいと覗いてみたが、結構命がけの行軍になりそうだった。

俺にとつての一時的避難場所、何か人目につかないことをやりたい連中にとつての隠れ場所も、その農地周辺になる。人気は少ないし廃屋もそれなりにある。

野郎が赤毛をその場で殺さなかったのを考えると、その行動はぼちぼち慎重であると考えて良い。出来る限り落ち着いた場所で事に及びたいはずだ。赤毛に何か別の価値があったとしても、貴族のご令嬢を攫ったわけだから、町中に潜伏したいとは思わないだろう。帝国を回しているのは貴族なのだから。

とはいえ、白昼堂々攫った事を鑑みれば、余裕はそれほどないのかも知れない。自信があるのか、あるいは高いリスクを背負うほどに焦っているのか……。

とまあ色々と考えながら馬を走らせている内に、町並みは消えて代わりに広大な農地が現れた。

青い空と緑の大地。

そこを走る一本の道。

と、心和む風景が広がっている。頬を撫でる風も爽やかの一言に尽き、ふと幼い頃の記憶が蘇る。あの頃は俺も純粹だった。物乞いがいれば蹴りをくれてやったし、美人がいればスカートを捲り上げてやった……ろくなもんじゃねえ。

汚れない自分を捜して赤ん坊の頃の記憶をねつ造しようとしたところで、道の先浮かぶ黒点が目に入る。

「お、あれはひよつとしたらひよつとするか？」

手で輪っかを作りそれを覗き込む。

するとぼんやりとだが、微かに赤いものが見えた気がした。見間違いの可能性だって十分あるが、取りあえずここまでやったのなら邪神もカンベンしてくれるはず。俺のケツの穴はまだヴァージンでいられるだろう。

馬の腹を蹴って速度を更に上げる。

十秒も経たぬ内に点が大きくなり、それが邪神の所望品である事をはっきりと認識した。

「しかし、一体何をもたついてんだ……？」

馬の速度に大きく差がない限り、普通は追いつく事など出来はしない。一頭に二人乗っているとは言え、赤毛は大した重さじゃないだろうし、こんなにみるみるうちに大きくなるって事は……ああ、なるほど。

「放しなさい！ 放せっ！ この××××！」

風に乗って届いた可憐な声は、この俺がげんなりするほどに下品な言葉を形作っていた。

……何だろうな。実は俺、無駄足だったんじゃねえか……？

俺のため息が聞こえたのか、暴れる赤毛とそれを取り押さえようとしている男が、同時にこちらを振り返った。

赤毛が目を輝かせ、歓声のようなものを上げる。が、そっちは既に意識から切り離れた。

もちろんうざったかったのもある。だがそれ以上に、突然余裕がかき消えたからだ。後数秒で訪れるその瞬間に向けて五感を極限まで研ぎ澄ませるのに、有り体に言えば俺は必死だった。
なぜかって？

野郎だよ野郎。

あの帽子を目深に被ったその男だ。振り向いたそいつの視線がやばかったからだよ。だからこそやつが赤毛を地面に放り出し、馬を走らせたままくりとこちらに向き直るなんていう離れ業を見せつけてきたときも、俺はぎょっとしたりはしなかった。

遂に二頭の馬が重なった。

男が懷に手を入れたのと、俺が腰の鞘から剣を引き抜いたのはほぼ同時だった。

一瞬後。ザザと音を立てたのは俺の足裏だ。乾いた作業路の砂がこすれ合う、その音だった。

俺はくの字に曲げた膝に力を込め、ゆっくりと身体を起こした。

「はっ。化け物かよ……」

視線の先、作業路の彼方に消えていくのは馬に乗った男の影だ。俺の傍らにはさっきまで乗っていた馬が蹄で土を蹴っているが、今さらこいつを駆ったところで追いつけはしない。馬も御者の腕もあちらが上だ。先ほどと違って暴れる赤毛というハンデも、もうないのだから。

「ひどい扱いだわ。全く……」

どす黒い怒りを声に滲ませたのはもちろん赤毛。身体についた土や砂を払いながらこちらに近寄ってきた。どうやら怪我はないらしい。走る馬から放り出されてこれだという事は、投げた野郎が上手く調節したからに違いない。

それを知っているのか知らないのか。女は俺の前に立つと、何事もなかったかのようににこりと笑いやがった。

「グーデル様。まずは助けていただいた事を感謝いたします。出来ればもう少しだけ優しくして欲しかったです」

「うるせーよ」

何て厚かましい。

と言うか、攫われかけた女ってもったとう、童女のように泣きわめいたりするもんじゃないのか。

まあ、こいつには想像もつかんけど。

「ですが、さすがはグーデル様。何がどうなったのかは良く解りませんでしたが、あの男の右腕がこうして地面に落ちている以上、先ほどの戦闘は見事勝利なされたのですね」

血まみれの肉塊を見下ろして、女は笑みを一層深めた。

こいつ、ひょっとしてそれがふわふわの子犬にでも見えているのか。

赤毛がああ男のように、馬に乗ってどこかへ消えてくれる事を割と本気で望みながら、最近驚くほどに仲良くなつた溜め息の野郎を、俺は口から吐き出した。

「取りあえずあれだ。さっきのは俺の負けだ」

「え？ どうしてです？ グーデル様の腕は二本ともちゃんといっています」

「そういう話じゃねえよ。これ見ろこれ」

俺は手に残つた軽いそれを何度か振つて見せた。

するとさすがの赤毛もようやく理解できたらしい。青い瞳が丸くなる。

「あ……折られたんですか。剣を――」

「そういうこつた。やつは後ろ向きで馬を操りつつ、不自然な体勢のまま短剣を振るい、そして俺の剣を叩き折つた――いや、打ち砕いたわけだ」

馬の勢いも利用した俺の会心の一撃は逆に利用されてしまった。

やつは剣と剣がぶつかる瞬間にタイミングと重心をずらし、こちらの勢いを殺しつつ、剣の脆い角度に己の短剣を滑り込ませてきた。俺もそれに気づいたからこそ、馬の背から飛び降りる事で剣の軌道を無理矢理変更し、切っ先でやつの腕を切り落とした。だがまあ

飛び降りたのは、そのまま突っ込んでいれば剣どころか俺の首が飛んでいたからでもある……。

「野郎が馬を止めて攻撃を重ねてきていれば、俺は道の真ん中でいつまでもひなたぼっこさ。ったく……」

やつが退いたのは右腕を失ったからか？

いや、そうじゃないだろう。

野郎の目は蛇の目だった。おそらく俺というイレギュラーが生じたため、冷静に計画を練り直すことにしたのだろう。あれほどの手練れだ、こんな頭のおかしい貴族の娘などいつでも狩れるはずだから。

しかし何より恐ろしいのはすぐに見切りをつけた事だ。

町中で攫うなどという危険を冒してでも手に入れた女を、あっさりと放り出し、己の右腕などには一切の未練を残さず立ち去ったのだ。あの鮮やかな逃走は俺の姿を見てすぐに決断しないと出来ない。あれほどの腕を持つていながら決しておごらないとは——ああ、やつもこの女と同じくらい狂ってやがる。

「取りあえず詳しい話を聞いてやる。俺も目をつけられただろうしな」

はは。

こうなりやあもうヤケだ。

とことん付き合ってやろうじゃねえか。

「そうですか。ありがとうございます。ですがグーデル様」

「ん、何だ？」

辟易つてのを顔に浮かべながら赤毛を見下ろせば、

「最初から私、貴方が引き受けてくれるって確信していましたわ」
傲慢をそこに見る羽目になった。

……ホント良い性格してるぜ、こいつ……。

こうして俺は気狂い共と踊り始めたわけだ。

第六話

さて、何から語ったものか。

……ん？

勿体つけずに続きを話せて……？

いやな。

実はよ……この場面において話す事はあまりねえんだ。

ああ。

あんたの気持ちも解る。

俺だつてそうだったさ。愛用つてほどじゃねえが、それなりに長く付き合つてきた商売道具を折られたんだ。避けようとしていたとは言え、かなりの厄介事の中心にいるらしい女の話に、ある種の強迫観念にも似た、妙な期待感を抱いていた事は確かだ。これが単なる家出騒動だったらただじゃおかねえつてさ。

ただまあ、なんだ。

予め目星をつけていた廃屋の一つに二人して入り、話し合いを始めたわけだが。

んー……どう言つたものか。

もちろん俺は一通りの話を女から聞いた。んで、女の依頼を引き受けた。

だがな。

それは別に女の話に納得がいったからでも、示された報酬の額に目がくらんだからでもないんだ。

正直に言つぜ。

女の話はさつぱりだった。

規模がでかすぎる上に、その赤毛、肝心な部分はいくつか伏せてやがったのよ。そんでもって俺の耳に届く頃には、女の話はまるで暗号じみた、哲学者の謎かけみたいになってたんだ。

俺は記憶力には自信がある。

依頼や報酬を誤魔化される事は良くあるから、きつちり覚えとかなきゃあ生き残れねえからな。だからそう、女に聞かされた話をそっくりそのままあなたに語ってやる事は出来る。本当だぜ？

ただ、あなたには理解できねえと思う。

その時の俺以上にだよ。

時間が流れたんだ。当時の俺が生きていた世界と、今俺とあなたが生きている世界は紛れもなく同じだが、例え同じ場所に立って同じものを眺めたとしても、それは全く別物になってる。それは解るだろう？

女の話はそう、時代に関係していた。

と言うよりも、女の取った行動が時代を変えちまったんだ。馬鹿げて聞こえるかも知れないがな、俺はそれを女の隣で見てきたから知っている。あなたが生きているこの時代は、あの赤毛がつくったんだよ。

鳩が豆鉄砲を食ったような顔、だな。

その時の俺も程度は幾分軽かったが、あなたと似たようなもんだった。

とは言え俺はあなたとは違う。

傭兵で、命が塵のように軽く、誰も助けちゃくれない。

ものを色々考えている時間も余裕もなけりや、呆然としているわけにもいかない。状況の変化を素早く読み取り、最適な行動をする。それがそれまでの俺であり、だからこそその時の俺は女の話を保留にした。その上で自分が取るべき行動を考えた。

既にその時の俺は厄介事の渦中にいた。

俺はそれを予想するに必要な情報を十分に持ち合わせてはいなかったが、傭兵として生きてきた直感に耳元で囁かれた。

？この渦から自力で抜け出す事はもう出来ない？ってな。

そしてその直感に対し、経験は一つの答えを弾いて見せた。

——ならば渦の中心へ行け。そこからなら全体がよく見えるだろう。

俺は自分に従う事にした。

女の話をよく理解せぬまま、女に付き従う事に決めたわけだ。
状況に合わせて行動する。

それは正解だ。

生き残りたけりゃあ、それ以上のもんはないだろうさ。

だがな、何かを手に入れたいと願うなら、てめえの周囲なんて気にするべきじゃない。目指すべきものは視線の先あり、それに向かつて歩く事こそが人生ってやつだからだ。周りしか見ないってのはそれこそ、俺が毛嫌いする神を崇める連中の仲間入りをするって事だからだ。

だからこそ、だ。

職業病とは言え、その時の俺の選択は間違いなく愚かと呼べるものだった。自身の意志が存在しなかったからな。

だがな、今振り返ってみる限りじゃあ、悪くない選択だったとそう言えるぜ。何しろ俺は女に付き従う中で——女と旅をする中で状況に合わせず、自分の意志だけで歩くチャンスを手に入れたわけだからな。ひよっとするとあんたにも、俺の話を最後まで聞けば俺と似たような機会が訪れるかも知れない。

今この場所で、女の話詳しくは語らない。

話しても解らない以上に、話さない事で得られるものがあると思うからだ。

だが心配しなくて良い。

俺の話を聞く内に、きっとあんたはその全貌を否が応でも知ることになるだろうからな。心配する必要はない。

てなわけで話を進めよう。

必要な装備を急いで調えた後、俺と女は町を後にした。

農村部の森林地帯からじゃない。正門から正規の手続きを踏んで、
だ。

幸い帽子野郎の襲撃はなかった。やはり女を攫った時がイレギュラーで、リスクを好むイカレ野郎ではなかったらしい。正々堂々と

町を後にしたのも、街道をごく普通の馬車で進んだのも正解だった。苦勞という苦勞は、乗り合わせた婆さんに四六時中話しかけられた事くらいか。まあそれも、赤毛が話し相手を買って出たため大した事はなかった。

危険を全く感じぬまま、一週間ほどで目的の都市に到着した俺と赤毛は、その真っ青な城壁をさほどの緊張感も持たずに間近で見上げていた。

？中立都市サウダルーデ？

連合国と帝国。その二つの権力が入り交じるせいで、奇妙な緊張に満ちたその都市で、俺たちは一人の男を捜し始めた。

話の続きはそこから始まる。

第七話

「宿はどうすんだ？ 先に決めとかなくて良いのか？」

「これから向かう先に用意してもらいますから、大丈夫です」

「向かう先って……なんつったか、ユキ……ユキゴ……」

「ユキゴドリス。ユキゴドリス・センダック、オーロス王国の第二王子です。彼が住まう大使館が私達の目的地です」

「オーロス……道理で変な名前なわけだ」

朝から昼に変わる陽の光の中、俺たちはサウダルーデの雑踏をかき分けていた。

ああ、うんざりするほどの人の数だ。右を見ても人、左を見ても人。いねえのは上と下だけだ。息が詰まるどころか、下手するとケツの穴まで詰まりかねない。そんな感じさ。

大陸広しと言えど、これほどの人間がこった返すのはサウダルーデくらいだろう。理由をいくつか説明しようとすると、一番最初に挙げるべきなのはもちろん？ 中立都市？ であるというその事実だ。

聞き覚えのない名前だろう？

今じゃどこにも存在しないものだからな。でもまあ、昔は結構にあったのよ。この手の都市だの国だのは、基本的に大規模な戦争が一段落した頃に出てくるんだ。つっても平和な時分ってわけじゃねえからな、そこそこしつかり覚えとけよ。

サウダルーデの誕生は、俺と赤毛が訪れたその日からさかのぼる事だいたい十年前ってとこだ。

そう、その通り。

帝国と連合国が停戦条約を交わした年のことだ。これからはケン力なんかせずに、仲良くやりましょーねって、まあ表向きはそんな感じ。その象徴としてつくられた都市がサウダルーデなんだよ。でも言ったとおり、そいつは表向きの話であって本意じゃない。

牽制だよ牽制。

停戦の最たる理由となった大飢饉。大陸全土を襲ったそいつに、連合国も帝国も兵糧の確保が出来なかった。攻めるのも攻められるのもやばいわけだ。そこで条約を交わし、平和の象徴と謳いながらつくった都市に、双方の人質だの何だのを押し込めた。国力を回復するまでの均衡維持装置というのが、この町の存在意義さ。互いの腕にはめた手錠と言え解りやすいか。相手が殴れないと解っても安心は出来ない。人間ってのは悲しいもんで、自分が優位じゃないと落ち着かないんだからな。

でもまあ、たくましいのも人間さ。

地盤にどういう理由があるにせよ、今まで交流を禁じられていた敵国の文化が、一カ所に集まるんだ。治安が徹底されているから、様々なものの安全は保証されている。結果としてやる気に満ちた商人どもがこぞってサウダルーデにやってきた。凄いもんさ。何せ今まで儲けていたのは国营の武器工場ばかりで、連中の出番はほとんどなかったんだからな。念願叶った商人達は、怒濤の勢いで都市の中核を形成していった。

するってーと当然、一般人が来始める。価格競争のお陰で物価は安いし、異文化も楽しめる。良いことづくしさ。居住を希望する民間人が多すぎて、抽選が何度も行われたくらいだからな。ここに住んでる連中は皆、活力に充ち満ちているのよ。だからまあ、この人混みもいつもの事で特別なもんじゃねえんだ。

でもあれだ。

俺にとつては特別なわけ。

「グーデル様。警戒されているのは解りますが、もう少し顔を和らげてもらえませんか。通行人の方々が怯えています」

「ああ、そうかい」

怯えさせてんだよ。

そうすりゃちつとは歩きやすくなるからな。何なら下半身を露出してやっても良い——マジでやったら殺されるな、俺。

「……ヤメテおいてやるよ」

「ええ。その方がよろしいですね——ああ、そうだ」

赤毛は突然足を止め、俺の姿を頭の天辺から足の先まで眺め回した。その目つきはまるで、食材の値段を冷酷に見比べる主婦みてえな、息の詰まる恐ろしいやつだった。ここだけの話、ナニがきゅって縮こまったよ。

「ちよつと寄り道しましょう。着いてきてください」

行き先はもしかして奴隷市場ですか——。

思わずそう尋ねそうになったが、下手に刺激して現実になってもらつては困るんで、いつでも逃げ出せるように身体の重心を落としながら、女のその目立つ赤毛を追いかけた。

ヘタレ、だと……？

うるせーよ、バカ。

俺はそう、裸だった。

いや。心がどーのとか、そういう比喻じみたやつじゃない。そのままの意味だ。俺は裸、全裸だった。

俺が自分から脱いだわけじゃねえ。

脱がされたんだよ。

身長を何だのを測られた後に、服を全て脱ぐように命令された。

おっと、断つておくが赤毛に言われたわけじゃねえぜ？ ひよつとすると勘違いしたかも知れないが、背中と胸の区別もつかないような貧相な体つきのガキと、ヨロシクやる気は毛頭ねえんだからな。第一、ナニがたたねえ。

俺に服を脱げと言ったのは見知らぬ女だ。その眼鏡の奥から俺を見る二つの目は、ああ、まるで蟻の行列か豚の交尾を眺めるような感じだったよ。この俺が思わず愛想笑いを浮かべちゃったくらいさ。俺は観念した。

だから服を脱いだ。それだけの話だ。

ああ、そうだな。さつきは否定したが、心の服も一緒に脱いだんじゃないかな。誇りとか尊厳とかいう名前の、脱いじゃいけないやつだったのかも知れん。まあ、全てがもう手遅れだった。

お袋。俺は今から豚になる…………。

「まだですか」

「もうちよつとだ…………」

「早くしてください」

カーテンの向こうから急かす赤毛の声が飛んでくる。

さあて、俺の値段はいくらだったんだろうな。声は怒っても喜んでもいないから、きつと妥当なところだったんだろう。

卑屈な笑みを顔に浮かべ、俺は先ほど渡された服を手にとると、いそいそとそれを身につけ始めた。

これからの俺に相応しい服装。

俺を悪く思っていないやつが見れば、この悲劇を嘆くだろう。涙を流すやつだっているかも知れない。俺を悪く思ってるやつは正反対に、喜び勇んで唾を吐きかけるだろうな。ふふふ…………。

「まだですか」

「ああ、もう終わった。今行く」

俺は目尻に浮いた涙を拭い、新世界に繋がるその白いカーテンを開けた。

さあ、地獄の日々の始まりだ。

これから何度も嘆く事になるだろう。だから今だけは笑ってやるうじやないか…………。

「何か悲しい事でもあったのですか、グーデル様。いや…………騎士グーデル」

「…………なあ、おい」

「何でしょうか、騎士グーデル。あと、私を呼ぶときは？主様？か、フィオナ様にしてください。それから？俺？ではなく？わたくし私？と」

「ええ——それは困るよ……」

「気色の悪い声で言っても駄目です。ほら、もう少しで着きますから背筋を伸ばして胸を張ってください。顔もちゃんと引き締めて」
「ははは………」

俺は笑った。

死を目前にした老人のように。

俺たちを乗せて走る馬車がそれに同情するように、ガタガタと悲しげな音を立てた。俺は何でもないと首を振り、微笑みを浮かべたまま窓の外へと視線を流した。

夕日に燃える町並み。

窓枠に区切られた黄昏の世界は、まるで一枚の絵画のようにも見える。胸の奥を疼かせるはずのその儚さは、しかし俺には届かない。この心には届かない。俺の視線に映るのは黄昏ではなく、窓硝子に反射した自分の姿だった。

見知らぬ男だと。

現実を認めたくない心がそう囁く。が、そこで哀しげに微笑むのは紛れもないこの俺である。

身につけるのは灰色と黒を基調とした騎士の衣装。派手ではないが格調の高さが一目でわかる装飾、しかし羽根のように軽く動きやすかった。

腰に下がる剣は重すぎず軽すぎず、その上恐ろしいほどの切れ味を持った業物で、上等な革をまかれた柄は、握れば肌に吸い付くような安心感を与えてくれる。

ブーツですらハンマーで叩いても大丈夫なほどに頑丈なくせに、履き心地は冗談のように柔らかいという謎の代物。

ああ、髪に至っては上品に切りそろえられ、綺麗に撫でつけられていた。何の手も入れてない灰色の瞳すら、いつもより高貴な色を放っている様だった。

赤毛の台詞が記憶の底から這い上がってくる。

——グーデル様には私の騎士になってもらいます。よろしいですね。

「冗談じゃねえ……」

連れて行かれた先は奴隷市場よりもひどかった。

上級貴族御用達の店、店、店。

しかもあの女、品物値段なんて見もしないし聞きもしないんだぜ？紙に書かれた会計をちらりと見るとよ、服を買った時点で既に、俺が一生働いても稼げないほどの額が目飛び込んできた。仰天して口が呼吸を止めちまったもんで、あやうく俺は尻で息をする最初の人間になるところだったよ。マジでやばかった。

まあな。

俺も大人だ。

その上心が広い方だから、話が解らないでもない。小国とは言え、相手は行く行くは王になるかも知れない王子様だ、貧相な傭兵を連れて行くわけにはいかない。解る。解るぜ。すつこくな。だからそう、普通なら連れていかないだろ？置いていくだろ？宿でも酒場でも門の外でも良い。待てと言われたら忠犬よろしく、じっと赤毛の帰りを待つてるさ。

……騎士になれ？

おいおい。

おいおいおい、だ。

いかれ具合も大概にしろよ。俺は農村の出な上に、卑しい傭兵様だぞ？その俺を、だ。ちよつと庭の隅でタチションでもしようとなニを出しただけで、槍で突き殺されちまう大使館に連れて行く……？

論外だ。

そう思うだろ？

膀胱がぱんぱんになっても、俺が齒を食いしばって滝のように股間を襲う尿意に耐えて見せたとしても、だ。

やばいぜ。

赤毛が自分の騎士だと言い張って見せても、俺が傭兵だと解ればアウトだ。赤毛は大丈夫だろうが、俺は間違いなく豚の餌になる……。

お、落ち着け。

まだそうなると決まったわけじゃねえんだ。騎士っぽい演技を上手くしてみせりゃあ、王子様だって気づかねえさ。そうだ、そうしよう。生きるために、明日を掴むために、俺は今から騎士グーデル様になる——！

「グーデル。そろそろ着きます。準備なさい」

「赤毛デメエ、呼びつけとは何様のつもりだコラ……コラ……」
引きつった俺の顔をじっと見つめた赤毛は、何度か無言で瞬きした後、

「人前では出来る限り黙ってなさい」

「はい。そうします……」
時を置かずして馬車が大きく震え、窓の外の景色が動かなくなつた。

お袋。俺は今から豚になる——

鳴かない豚に、俺はなる。

第八話

とある国の王子様。

敵対する帝国の上級貴族達と渡り合うべく、遠く離れた中立都市へとやって来た、心に筋金は何本も通っている男の中の男。ちよつと機嫌を損ねただけで母国が火の海になる状況で、しかし帝国貴族達に媚びへつらわず、その悪意をひらりひらりと躲して見せながら、王族の気品を損なう事なく余裕を持って微笑む……。

なあ、あんた。

これだけの話を聞いた時、あんたの頭に浮かぶ王子イメージはどんな感じだ？

すらりとした均整の取れた肢体に、愁いを帯びた瞳を持つ美男子。どうだ、当たりか？

まあ多少はずれたにせよ、ハンサムである事に代わりはねえだろ。違うか？

あんたはどうだか知らないが、俺はまずそう思ったよ。何しろ俺は赤毛だの、その親戚らしいニコニコ野郎だの、あのクソアマだのを知っている。どいつもこいつも中身は俺以下の変態どもだが、見てくれだけは恐ろしく整ってるんだ。血を長く保つ結果だよ、中身も見かけもな。それについて色々と思うところがあるが、まあ今は置いておこう。とにかく、ただの貴族ですらあなんだから、その親玉みたいな王族ってやつはきつと、男だろうが女だろうが一目会った瞬間にナニが臨戦体勢に入っちゃまうような、そんなご面相をしてるに違いねえ。俺はそう思っていた。

しかし、現実はいつだって人間を裏切る。

良い方に、なんて事は滅多にない。大抵やつは悪い方に転ぶ。壊さなくても良い幻想を木っ端微塵にぶち壊す。

「ユキゴドリス様。お久しぶりでございます——」

馬鹿みたいに豪華な大広間。

その中心で威風堂々と椅子に腰掛けるオーロス王国第二王子に、赤毛は優雅に頭を下げていた。俺はそれを赤毛の斜め後ろで眺めながら、残酷な現実には歯を食いしばって耐えていた。

王子はそう、控えめに言って豚だった。

もとい、人間の形をした豚……違うな。いい加減認めなければならぬ。あれは豚じゃなくて人間だ。

はつきり言おう——王子はデブだった。しかも平民レベルのデブじゃねえ。王族レベルのデブだった。デブキング、いや、デブキングプリンス。腰掛けている椅子はやつが座っているからこそ小さく見えるが、実際は普通の男が氏五人は優に腰掛けられるくらいの大ささだ。それがブヒブヒの代わりにギシギシと悲鳴を上げる。

「フィオナ・セリアード！ 久しぶりだ。五年ぶりか？ また一段と美しくなったな」

現実には更に鞭を振るう。

王子様の声が紛れもない豚のようだったからじゃないぜ、むしろその逆だ。ああ、男の俺でも聞き惚れちまうような良く通る渋い声だった。もし目の見えない女がそれを聞けば、名前を呼ばただけでも虜になっちまっただろう。そんな悲しくも美しい声で、王子様は続けなすった。

「しかしお前が一人で来たという事は……ふむ」

肉の奥に埋もれた緑色の小さな瞳が、妖しい光を放った。腫れぼったいピンクの唇が、ゆっくりと弧を描いていく。それはまさしく傲慢なる権力者の笑みだった。

「——何やらやらかす気なのだ。大使とは名ばかりに、見捨てられた第二王子でしかないこの私を利用して、一体何を始める気なのやら。戦でも始めるのかね……？」

ああ、鞭はトゲ付きだったらしい。

王子様、メチャクチャ切れ者じゃねえか。そりゃあ何の問題も起こさずにこの都市で生活しているって時点で、俺なんかとは比べられないほどの頭を持ってるってのは十分想像のつく話だが。にした

って酷い話だろ。あとは見た目さえ良ければ、人並みに痩せてさえいれば完璧だったのに。これじゃただのプリンスキングデブだ。ん、違った。プリングデブ、いや、デプリンスだったか……？

まあ何だって良い。どの呼び名にせよ、呼んだらすぐさま処刑だもんな。王子様はユッキー程度にしておけばいいさ。

しかし、だ。一目見て赤毛の魂胆を見抜くとは……俺、やばいんじゃないか？

瞬間、尿意が俺の股間を駆け抜けた。

正体がばれるのを怖れた俺は、とっさに機転を利かして彫像の真似をする事にしたよ。

タイトルはこうだ。

？トイレ、貸してください？

「いいえ、ユキゴドリス様。私は戦を始める気など毛頭ありませんわ。私は殺し合いというのを、とても無益なものだと考えていますし。それにもし万が一、私が力を振るう機会が訪れたとしても……」尿意とは無縁らしい赤毛は、歌うようにそう告げた後、純粹無垢を体現したかのような可憐な笑みを浮かべた。

俺はもちろん、王子様もおそらく、赤毛の本性がその見た目とは真逆であることを知っていたのだろっ、くすりと笑うその声を聞いた時、全身が無意識にびくりと震えていた。

「それは一方的な殺戮になるでしょうね。ユキゴドリス様もそうじゃないくて——？」

クスクスクス。

頬を赤く染め、青い瞳をきらきらと潤ませながら、赤毛は可笑しそうに笑った。

……なあ、あんた。

夜空に三日月が浮いているのを見た事がないか。それを見て、まるで夜が笑っているみたいだと思った事はないか。

このとき俺が見た三日月は、夜じゃなく夕暮れの空に浮いたやつだったんだろうな。血のように赤く染まる空でくすくす笑う三日月

さ。嘘みたいに聞こえるだろうがな、俺はその時、塵一つ落ちてない病的なまでに清潔な大広間で、生臭い血の臭いを確かに嗅いだ気がしたんだよ。慣れたはずの俺でさえ、思わず吐きそうになるほどの濃いやつさ。早くここを離れると、遅漏の本能だかボケ気味の守護霊だかが耳元で口うるさく騒いでいたよ。まあ、一言で言えばあれだ——最低の気分だった。

多分、それは王子様も同じだったんだろうな。

「——まあ、良い。お前の求めには出来る限り応えてみせるさ」

王子は血の気の引いた顔を何度かひくつかせた。多分笑おうとして失敗したんだろう。だがまあ客観的に言うのであれば、それは豚がエサに毒を盛られて痙攣している様にしか見えなかった。

当の王子は顔をしかめたが、俺はそれを見たお陰で胸のむかつきが幾分か引いていた。無意識に、しかしがっちりと剣の柄を握りしめていた利き手を引きはがせるくらいには、余裕を回復する事が出来たのさ。俺は王子様に生ゴミを差し入れてやりたい気分だった。もちろん感謝の印だぜ？

「ふふ、ありがとうございます。ユキゴドリス様」

王子は自分の名前を呼ばれるのを嫌がったみたいだった。誰よりもこの赤毛には呼んで欲しくなかったんだろうな。解る。解るぜ。俺も呼ばれる度に、ナニを冷たい手で鷲掴みにされるような気分を味わってるんだからな。

いい年した野郎二人を笑い声だけでびびらせる赤毛は、小さく丁寧に頭を下げて見せた。

「さしあたっては今晚泊まる部屋を用意していただけますか」

ほっと息をついたのは二人。

もちろん俺と王子様さ。

不死の軍団とか、帝国を一瞬で吹っ飛ばす爆弾とかを予想していただけに、案外普通の要求で良かった良かった。

はは、一国の王子と野良傭兵が同じ立場でものを考えるんだから、人生ってわからねえな。なあ、そう思うだろ、ユツキー？

俺の劳いの心はしかし王子には届かなかつたらしい。油の切れた蝶番のように、王子はぎこちなく頷いて見せた。

「……ああ。そのくらいならおやすいご用だ。何人分用意すれば良いかね？」

「一つで結構です。騎士グーデルは私の部屋で待機しますので」

「解つた。すぐに取りはからおう。おい、誰かおらぬか——」

それは風のように吹き抜けた。
あまりにも自然すぎて、俺は一瞬、頭の上の麦わら帽子が風に浚われたのに気づけないほどだった。

だから俺は、振り返り、飛ばされた帽子を拾いに行こうとしたんだ。大事な大事な俺の身体の一部だよ。安眠と名付けた最後の聖域だったんだよ。でもな、俺が天高々と手を挙げて、異議を申してるよりも早く、侍女がぺこりと頭を下げやがったんだ。

「お部屋までご案内します」

終止符さ。

俺は帽子を取りには戻れなかった。

それだけ。

それだけの話なのさ。

「それでは、ひとまずこれで失礼します。ユキゴドリス様」

「ああ。夕食の席でまた会おう。料理長の腕は中々のものだ。期待してくれて良い」

「はい。楽しみにしておりますわ」

話が進み、そして終わった。

王子は席を立つと、その外見からは想像もつかない素早さで大広間を後にする。

そして俺は孤独に愛された。

「では、こちらへ」

侍女の声が俺の首に縄をかける。抵抗も出来ずに引きずられるその気分は、きつとこれから慣れて行かなきゃいけないんだろっさ。
俺は運命の奴隷に選ばれたわけなんだから、この先は何度だってこ

んな絶望を味わう羽目になるんだ。

赤毛の後ろをとぼとぼと歩く俺の姿はそう、鳴かない豚なんていうもんじゃなかった。鳴こうと思えば誰よりも雄々しく鳴けるけど、今は鳴かないだけだ、耐えて見せているだけだ……なんて、そんな格好いいもんじゃなかったんだよ。

「——あなた。先ほど私に斬りかかろうとしましたね。部屋に着き次第お話があります。覚悟しておいてください」

赤毛が前を向いたまま小声で、しかしはっきりとそう呟いた。

俺の心は去勢された。

鳴けない豚。それが俺だった。

第九話

部屋に入ってから出てくるまでの時間を、俺はこの口で語るつもりはない。

あんただって聞きたくないだろう？

いい年こいた男が、年端もねえガキ相手に嬲られ、泣きそうになるのを必死に我慢している様を見たいか？ 足下のふかふかの絨毯に真理を見つけた男の話を聞きたいか？ それを聞きたいって言うのならあんた、俺はこの先何も語るつもりはねえよ。俺が例え去勢された豚であつたとしても、守らなきゃいけねえもんがあるんだ。どんなにちつぽけに見えてもな――。

…… ああ、感謝するぜ。

ここまで話が出来たのはあんたが初めてだから、叶うことなら最後まで話を聞いてもらいたいというのが俺の本音だからな。あんたの舌をフォークで引き抜くのは止めておきたい。

それで、夕飯時だが。

まあ実はここも、あまり話しておくようなものはない。知っておくべき事実は一つだけだ。目を疑うほどの豪勢な料理がバ力でかいテーブルに所狭しと並べられていた事と、その席に座れたのは二人だけだつたって事だ。

赤毛とユツキー。俺はハブだ。

まあな。

解つてたよ。解つてたさ。

ただ、頭の中の想像に理解を得るつてのと、実際に目にする現実とに納得するつてのは全くの別もんだ。当然の話だがな。俺はそれに改めて気づかされたのさ。上品にナイフとフォークを動かす赤毛。その後ろの壁を背に立ち、虚空を親の敵のように睨む俺は、ああ、これまで話してきた中で一番引き締まった顔をしていただろう。きつと立派な騎士に見えたんじゃないかな。

ああそれと、あのデブの王子様だけだな。

やっぱり大したやつだったみたいだぜ。食事中に帝国の貴族連中との定例会議の話が出たが、無理難題を押しつけようとする連中にうまい具合に立ち回っているらしい。言ってる内容は俺にはさっぱりだったが、王子の、

「この都市の帝国貴族は、既に捨て駒と入れ替えられているからね。それをちよつと言葉の端に臭わせてやるだけで、すぐに大人しくなるから簡単だよ」

っていう発言にはさすがの俺も肝を冷やしたよ。似たような事を知り合いのクソアマが一度言っただのを思い出したからだ。

——帝国における名ばかり貴族を次々にサウダルーデへと投入し、それまで都市にいた有能な人間を首都へと帰還させている……。

解ると思うがな。

これはやばい話だ。やばすぎる話なんだよ。知り合いの変態は所謂？有能な人間？の方であつたからこそ、その裏事情を知る事が出来た。普通のやつならまず知らない、知る事が出来ないその事情。つまり機密情報さ。そいつを事もあろうに連合の大使である王子が知っているんだ。きな臭いどころか、火薬の臭いもするんじゃないのかってくらい、やばい話だった。

「解ってると思うが、近いうちにこの都市は意義を失うよ。奪われると言つても良いが」

「ええ。ユキゴドリス様も、出来る限りお早い内にオーロスへと帰りなつた方が良いですね」

「帰る場所などないさ。他でもないこの私も、捨て駒の一人なのだからね」

王子はどこか疲れたように笑い、そしてそれが晚餐の締めくくりとなった。

赤毛は何も言わず、小さく頭を下げた。

その時のやつがどんな顔をしていたのか、後ろに立っていた俺に

は見えなかったよ。

ただ、部屋に帰るべく席を立ったその横顔は、いつも通りの、熱に狂ったような色を浮かべていた。

× × × × ×

夜中の事だった。

暗がりです顔を上げた俺は一瞬、空腹が目覚めさせたのかと考えた。しかし、食堂から部屋に帰ってすぐ、侍女に持ってきてさせた？ 騎士相応の料理？ をたらふく食った事を思い出すと、自分が目を覚ますこととなった本当の理由を探し始めた。

最初に目に入っただのはもちろん、隣ですやすやと眠る赤毛の顔だった。ついでに自分の背中や腰がギシギシと痛みを發しているのに気づく。

はは。

今、間違いなく勘違いしただろ？

一発ヨロシク？ 添い寝？

馬鹿言っちゃいけないえ！

前者のようなえげつない、後者のような可愛らしい想像をしたあなたは、まだまだ赤毛の事を理解しちやいないようだな！

あ？

何をいきなり怒り出してるんだ？

くくく。

これを怒らずしてられるか。

良いか、良く聞けよ。よく聞くんぞ。

この俺様はな、この赤毛の悪魔にな、ベッドに眠るなと言われて、床にも寝るなと言われてな、ベッドの横に椅子を置けと言われてな、そこに座って寝ると言われてな――。

ふ、ふはは。

ここまで酷い仕打ちを受けたのは人生で二度目だ。

一度目は語りたくねえ。話したら俺の心は壊れちまうよ。

しかしこうなったらよ。ガキの身体には一切興味がねえが、絶叫を上げてくれるなら一晩中腰を振っても良い気分だぜ……。

とまあ、それはさすがに冗談だが。ガキ相手にアレがしつかり反応するかどうか心配だったからでもあるが、何よりもその後が怖かったんだよ。ビビって剣を抜きかけただけでもあれだったんだから、ガチで手を出したらそりゃあもう……。むしろテメエの純潔の代償に、地獄まで付き合えと要求してくる可能性の方が高い。まあ最も、既に似たような状況にいるのかも知れんが。

「……はあ」

ため息をつき、傍らの寝顔を見下ろす。

「寝てるときは天使様ってか……」

——ずっと眠ってて欲しいね。

俺は儚い笑みを浮かべ、やれやれと首を振った後、静かに目を閉じた。

明日は明日でしんどいんだろう。休める時に休んでおかないと、

この災厄の渦から抜け出す切っ掛けを見失ってしまうかも知れない。

俺は孤独なる戦士。

赤毛が踊る現実という名の戦場に召喚されるまでは、夢という名の楽園で安らかに眠ろう——。

現実逃避に駆られる意識が、緩やかに闇に落ちていく。しかし完全に闇と融け合う寸前、俺の耳に、容赦の欠片もない無慈悲なその音が飛び込んできた。それはそう、

——楽園が崩れるその音だった。

ガシャンという派手な響きが、意識に絡みつく眠気を一瞬で跳ね飛ばした。

体中に飛びかかってきた窓硝子の破片を、顔にぶつかるぶんだけ腕で払い落としながら、俺はベッドの赤毛へと飛びかかった。冗談

みたいに細いその腰を掴み、間髪入れずに後ろへと大きく飛ぶ。

ベッドの上の闇を銀光が口惜しげに切り裂いたのは、俺がまだ空中にいるその時だった。

割れた窓から風が吹き込み、カーテンを一息に払いのける。月光が音もなく溢れ、ベッドの上の人影から闇を奪い去り、その姿を無造作にあらわにした。

ぴったりとした黒い衣装で全身を覆う、覆面の男。その男の瞳と男が手にした短剣の刃が水に濡れたように輝く。男がこちらに向かって走り出すのと、俺の足の裏が床を捉えたのはほぼ同時だった。

——まずい。

「……んっ」

妙に色っぽい呻き声を上げた赤毛を後ろの放り投げ、俺は全身から力を抜いた。するとリングが木から落ちるがごとく、俺の身体は自然と床へと沈んだ。

ヒュンという口笛にも似た音が頭の上を駆け抜ける。予想通り、短剣の切っ先は喉を狙ってきた。ひやりと汗に濡れた己の首筋を笑い、下半身で力を爆発させる。バネのように伸び上がった身体を僅かに捻り、右肘をそこにあるはずの男の顎へと触れさせた。

——手応え、あり。

頭蓋骨が軋む音が接触した肘から伝導し、頭の奥を痺れさせる。甘い快感が全身を走り抜け、更なる攻撃を要求してくる。

止める理由はない。

振り抜いた肘を支点に拳を回転させ、男の左のこめかみを挟む。

男は宙を飛び、壁ではなく床の上へと激突した。振り上げた右足の踵で、男の笑ってしまうほどにから空きの首筋を踏み抜く。

頸椎は物足りないほどに呆気なく砕けた。男はもう、ぴくりとも動かない。

「——ふん」

念のため剣で心臓を抉っておこうかと思ったところで、己の失態に気づいた。

「やべ……情報聞き出しときゃ良かった……」
失態だった。

いつもの俺ならまずやらない類のやつだ。それをやっちゃまった理由は、あんたにも解ると思うが。

教訓その一。戦闘でストレス発散は止めましょう。

「何です……襲撃ですか？」

何か情報になるものを持ってないかと、俺が死体をあさっている
と、ようやく赤毛が身を起こし、何とも微妙な科白を口にした。

俺は火で顔を潰した男を見て嘆き、赤毛の悪魔が帰還した事に嘆
いた。

「ああ。だがまあ、この間のやつとは違う。刺客にしちゃあ質が低
いぜ、こいつ」

「そうなんですか？」

俺が目覚めたのは多分、こいつのせいだったんだろう。襲撃
前に気配を漏らすとは、暗殺者失格だ。

「まあ、いいや。死体片づけて寝直そうぜ」

「そうですね」

面倒くさい俺と、器がでかい、もとい器が狂っている赤毛は珍し
く意見が一致した。死体は窓から放り捨てておけば良いかなあと首
をひねったところで、俺は叫び声を耳にして思わず顔をしかめた。

「悲鳴ですね。しかもたくさん」

赤毛が淡々と事実だけを告げる。

俺はうんざりしながらやれやれと首を振った。

「屋敷ごと襲撃されてるぜ、こいつはよ………」

無言でいそいそと着替えを始めた赤毛から目を逸らし、俺は割れ
た窓の外の月を見るときもなく眺めた。

ふと、嫌な想像が頭をよぎる。

ひよっとするとこの襲撃。俺らとは全くの別口なんじゃねえか――

――？

第十話

他人が生きようが死のうが、どうでも良い。

それが俺である。

金をいくらか貰える可能性があっても、武器を持った連中が暴れ回るような空間に飛び込んでいくってのは、俺にとっちゃありえねえ話だ。日頃の仕事とは訳が違う。俺はプロフェッショナルだから、一定ライン以上の情報を集められない限り、物騒な場所には足を踏み入れないのさ。だからまあ、たらふく飯を食わせてもらったとは言え、王子を助けに行く気なんて毛頭なかったんだ。

あんたなら行くか？

命の火が消えるのが見過ごせないっ、とか何とか言っちゃって、英雄気取りで意気揚々と人殺しにはせ参じるかい？

助けられたやつはそりゃあ喜ぶだろうし、相手が女や金持ちなら色々とおイシイ事もあるだろうよ。周囲は褒めるし、名誉も手に入る。自分だって満足出来るだろうよ。

でもよ、死ぬかも知れんのだぜ？

どれほど高潔な正義を持っていようが、神懸かった剣の腕を持っていようが、死ぬ可能性は跳ね上がるんだ。戦場じゃ強いも弱いも関係ねえんだよ。慣れた野郎でも一つ二つイレギュラーが重なっただけで呆気なく死ぬ。危険は前にも後ろにも転がってる。裏切るはずのない味方ですら裏切る可能性があるんだからな。

自分の命より大切なものも、生きる事で精一杯な俺には一生解らんだろうが、きっと確かにあるんだろうよ。

だけどな、その大切なモンの方を優先するとして、優先してなお最後の最後までテメエの命を惜しまないやつは、どんな理由があっても駄目なんだよな。生きる価値がねえと思うぜ。

……まあ、なんだ。

ついつい熱くなっちゃったが、俺が何を言いたいかっていうと、

だ。

極めてシンプルな事なんだが――

「ユキゴドリス様の元へ向かいましょう」

危険に飛び込んでいくやつは、はっきり言えばそう、

「――狂ってる……」

そういうこつた。

しかし相手は赤毛。

狂気は狂気でも、そんじょそこらの野郎と一緒にしてもらっちゃあ困る。

「可能なら敵を一掃して、大きな借りを一つ作っておきたいですね……俺に何と言えと？」

でも悪いがな、「はい喜んで」とは言えねえんだよな。だって無理なんだもん。

「ですがまあ、相手の戦力が不明ですし、取りあえずはユキゴドリス様だけでも助けましょう」

ちよつとほつとした。

てなわけで、俺は貝になるのを止めて口を開いてやった。

「お前ほつたらかして、俺に助けに行けと？」

上手い言い方だろ。

あんたも見習うと良い。

最初のやつを一言付け加えるだけで、如何にも誠実な義務感の強い人間に思えるんだからな。しかも別に嘘をついている訳じゃない。それがミソだ。

「私も一緒に行きます。恩を売るにはそちらの方がより効果的ですので」

「やらしいなあ。あのデブにそこまでする価値があるのか？」

「はい」

俺は胡乱げに赤毛を横目で見る。

暗がりの中、横顔を月光に照らされるそいつは、その愛らしい口元に腹黒な笑みを浮かべて見せた。

「王子は自分は捨て駒だと、口ではそう言っていますが、いざという時のためにいくつかの国と個人的なパイプを作っており、資産も相当に蓄えています。私がここに来た目的は、それらの乗っ取りですわ———ですので、まだ死んでしまつては困ります」

「まだ？を強調して言いやがる。
最悪だ。小悪魔なんてもんじゃない。伝説とかに出てくる大悪魔だ。人の生き血を啜る化け物だよ。」

「行きましよう。死体には何の価値もありません」

闇にも赤いその髪を紐でさつと縛り、さあ、と言わんばかりに小首を傾げて見せた。

まあな。

俺がどう足掻こうが、結局はこいつに振り回されるんだ。

俺は赤毛に従うしかない。

野良犬のようにやる気なく尻尾を振りながら、見えないところで狐のように隙を伺うのだ。首につながれた縄が緩むその隙を、じつと待ち続けるのだ。

そしていつかは森を抜け出す。

この赤い茨の森を、いつか必ず。

「———道案内しろ。場所は当然解つてるんだろうな」

赤毛は笑う。

自分の望むとおりの結果になつたと。こうなる事は最初から解つていたのだと、楽しそうにくすりと笑つた。

「もちろんですわ。さあ、行きましよう」

暗い廊下、背後に赤毛を伴つて進む。

忍び足つてわけじゃない、駆け足だよ。こつ五月蠅くちゃ、大声でオペラを歌いながらだつて同じ事だよ。

悲鳴、怒号、金属音。

いやはや、どいつもこいつも馴染みのもの。狭い部屋の中、狂った女にびびってるよりも、こっちの方が安心するってんだから、俺も大概哀れなものだ。おいおい、ちよつと視点を変えてみりゃ、俺はまるで赤毛から逃げているみたいにも見えるじゃねえか。

……リアル過ぎて笑えねえ。

「次を右です。しばらくすると下り階段になりますので、気をつけてください」

「あいよ」

言われるままに角を曲がったところで、ここに来て始めて多数の死体を目にした。走りながらざつと横目で眺めれば、壁や床にへたり込む血だの内蔵だのをぶちまける連中は、どうやらほとんどがこの屋敷の人間らしかった。

「間に合わない、でしょうか」

いつもと何も変わらない口調で、赤毛が淡々と尋ねてくる。

ちよつと前の俺なら、そのいかれ具合に顔をしかめているところだが、流石にもう慣れていたんでな、走りながら肩をすくめてやったよ。

「さあてな。死体の傷を見る限りじゃ襲撃者の腕は微妙だしな」

「そうなんですか？」

「ああ。部屋の窓から突っ込んできたやついただろ。あいつが、こいつらをやった連中の仲間だとすりゃ、当初の計画は出来る限り隠密に屋敷の人間を殺す、だったはずだからな」

「騒ぎになっている時点で二流だと？」

「そういうこと。この死体もほら、刃物で斬りつけたらしいが、ただの使用人相手に何度も得物を振るってる。下手くそだ」

「襲撃者の目星はつきますか？」

「王子の敵なんか俺が知るかよ。ただまあ、多分屋敷を襲ってる連中は、真つ当な訓練を受けた兵士じゃない事は確かだ」

「何故です？」

「足跡だよ、足跡。歩幅がかなり乱れてるだろ。正規軍の兵士が真

っ先に訓練させられるのが、同じ歩幅で歩く事なんだよ。集団戦術が基本だからな、ばらばらだと滅茶苦茶になる……それにこいつら、靴の種類がばらけてる。剣以外にも鈍器を使ってるやつもいるみたいだから——俺の同業者の可能性が高い」

「傭兵……ですか」

「ああ」

そう見て間違いないだろう。帝国の特殊部隊には、わざとこのような？ 乱れ？ を残して、相手方の予想をミスリードさせる部署もあるらしいが、いくら何でもそれはないだろう。

なぜかって？

簡単だよ。部屋でやりあった野郎に、俺が勝てたからさ。特殊部隊は戦闘のエキスパートだ、俺がどうこう出来る相手じゃない。

そうこうしてる内に、赤毛が言っていた階段が現れる。奈落の底に降りていくような急な階段。妙に狭いと思つたら、なるほど、壁や床に罫が仕掛けられていたらしい。首に矢をはやした野郎や、両足を膝から切断された野郎なんか、それはもう両手の指に治まりきらないくらいの数転がっていた。

「……なあ、お前罫があるって知ってたか？」

念のため背後に問うてみる。

「いいえ。前にきた時は何ともありませんでした。おそらく、王子が寝てから罫は作動するんでしょうね」

「……………」

おっかねえ。

こいつらがいなけりゃ、間違いなく俺が死んでたぞ。何だ、襲撃者にすげえ感謝したい気分だよ……………。

しかしあれだ。

階段の長い事長い事。真っ直ぐじゃなく、時折右に左にカーブしながら下っている。しかも罫の博物館かつてくらいに、古今東西の様々な罫が仕掛けられているんだぜ？ ここは最奥に宝が眠る洞窟か何かか？ しかし苦勞の末そこに辿り着いても、待ってるのはデ

ブの王子様なんだぞ。絶望で自刃したくなるやつもいるんじゃないか——もしやそれが最後の罠なのか……！？

とまあ、戦慄に身を震わせたりしていると、階段の先に扉が見えてきた。封を破られた開けっ放しの扉だ。それが意味するところはつまり、

「——あの向こうが王子の寝室です。急ぎましょう」

「あいよ」

まあ、別にどうでも良いもんな。

俺はただの傭兵だし、王子様には何の恩義もない。関心はゼロだ。だが、ちよつと面倒だな。

王子をぶつ殺した野郎が、扉の向こうにまだいるかも知れん。足音も歓声も聞こえてこないが、警戒はしておかなきゃならん。

「お前はここで待ってる。俺が良いって言つまで中には入ってくるな」

「解りました。お氣をつけて」

扉までもう少しというところで赤毛を残し、剣を鞘から引き抜きながらゆっくりと階段を下りていく。

扉の前まで来る。

ここから更に慎重に足を一步踏み出す——と見せかけて、身を投げ出すようにして勢いよく扉をぐぐり抜ける。

着地と同時に、視線と共に剣の切っ先を四方に向ける。が、何の反応もない。攻撃どころか、人間の気配一つ感じない。真つ暗な部屋の中は驚くほどに静かだった。息を殺したまま、ゆっくりと曲げていた膝を伸ばしていく。

廊下よりも暗い部屋の中、最初は見えなかったものたちも、闇に目が慣れれば次第にその輪郭を強めていった。

見たたのは複数の死体——その内の一つは、見覚えのある巨漢だった。

「入ってきて良いぞ」

嘆息と共に扉の外に声をかける。するとすぐさま軽い足音が飛ん

できた。初めは焦点の合わなかった青い瞳も、やがて王子のその姿を捉えた。

「ユキゴドリス様——！」

短い叫びを上げ、赤毛は王子の死体へと駆け寄った。

何となく茶番を見ているような気分になりながら、剣を抜いたままその後を追う。

血が手に着くのもいとわず、赤毛は名を呼びながらその身を揺さぶった。

すると驚いた事に、王子は小さなうめき声を上げた。

「……フィオナ・セリアード……か……」

か細い声、そして赤黒い大量の血が口から零れ出した。赤毛の頬は強かにそれを浴びる。が、本人はまるでそれが気にならないらしく、血を拭うこともなく王子に言葉を叩きつけた。

「ユキゴドリス様、しっかりしてください！ 死なないでください！」

必死の物言い。

俺は心中で「まだ死なないで、だろ」と呟きを漏らした。

「……私はもう駄目だ。刺客は何とか全員倒したが……私も致命傷をもらってしまったよ……」

「大丈夫です！ すぐに医者を呼びますから！」

俺はぎよつとして王子の周囲を見回した。転がる死体は全部で五つ。いずれも長剣と思しき切り口で、それは廊下で見かけた死体のやつよりも鮮やかだった。見れば王子の手には血まみれの剣が力なく握られていた。

驚いた。

この巨体で剣の達人とは。これで人並みに痩せていたら……は、もう良いか。

「……はは、安心してくれ……君の欲しいものは、机の一番下の引き出しに入っている……ほら、鍵はこの指輪だ……」

王子は血まみれの顔に笑みのようなものを浮かべ、右手の人差し

指にはまった金の指輪を赤毛に示して見せた。

いや、驚いたね。

王子に、じゃないぜ？

もちろん赤毛にだよ。やつめ、王子の言葉を聞くとすぐさまその指から指輪を引き抜き、さっと近くにあった大きな机に向かうと、言われたとおり、一番下の引き出しを開けやがったのさ。ごそごそやった末、小さな宝石箱のようなものを中から取り出した。

「——これですか、ユキゴドリス様」

背筋がぞつとする冷たい声で、赤毛は王子に尋ねた。

すると王子。死にかけの自分を放ったらかし、如何にも不躰に目当てのものを手に入れた赤毛に対し、しかし怒ることもなく、むしろ満足げに、先ほどとは異なるはつきりとした笑みを顔に浮かべた。
「ああ、そうだ……それが全てだ……私が手に入れた力、君に与えてやれる力の全てだ……」

瞬間、王子の身体から死にかけの人間のものとは思えないほどの気迫が溢れ出した。生気を失っていたはずの緑色の瞳が爛々とした光を放ち、赤毛をにらみ据える。

「フィオナ・セリアード！ 私はお前に全てを譲る！ その代わりに誓え、お前の魂に誓え————お前の理想を必ず現実のものとすると！」

俺は思わず後ずさっていた。

王子が発した意志には、一人の人間が今まで生きてきた中で味わった苦悩や後悔、絶望や希望が、余すところなく込められていた。鼓膜ではなく心を震わされるような、壮絶な言葉だった。

俺はすっかりびびっちまって、身を強ばらせているだけだったが、それを正面から浴びたはずの赤毛はピンと背筋を伸ばしたまま、無言で深く頷いて見せた。

それを目にした王子はニイと悪魔的な笑みを浮かべると、満足げ

に頷いた。

そして笑ったまま——絶命した。

「……………化け物め」

ようやく声を出せるようになった俺は、顔を引きつらせながらそう呟いた。

するともう一人の化け物は、嗤う彫像とした化した王子に歩み寄ると、その頬に小さく口づけをし、細い腕で王子の頭を抱きしめた。

「ありがとう——」

それは……何だろうな。

ああ、俺は突然解らなくなったよ。

赤毛。フィオナ・セリアードって女が、一体何なのか、突然さっぱり解らなくなった。俺の中じゃそいつは貴族の令嬢で、十歳ちよつとのガキで、丁寧な物腰のくせに実は傍若無人で、手の付けられないほどの狂人で——得体の知れない、人の形をした災厄でしかなかった。そう思ってきた。

だが。

だが、だ。

その言葉は、俺の中にあつたものとは真逆のものだったんだよ。

小さな子供が、心から愛していた祖父に別れを告げるような、清くて儚いもんだった。

あまりにもそう、弱々しかったんだよ。

だから俺は、混乱せずにはいられなかった。思わず後ろから抱きしめてしまいそうなくらい、俺はどうしようもなく動揺していたんだ。いや、後二三秒もあればきっとそうしていたに違いなかった。

でも、そうはならなかった。

俺がまだぐらついている間に、そいつは次を見据えたんだ。

「さあ。行きましょう」

立ち上がり、振り向いたやつ顔はいつもと同じだった。

どこか狂ったような不敵な微笑み。

俺が知るフィオナ・セリアードっていう女が、そこにいた。

「……………ああ」

俺は頷いた。

微妙な顔をしたまま、女の心を見透かそうとその青い瞳をじっと覗き込んだ。

——お前は一体、何者なんだ……………。

第十一話

ほとんど癡みたいなもんで、行動を開始すれば頭の中も心の中も極めてシンプルになる。

つつてもまあ、大抵の人間はそうだろう。目的がはっきりすると雑念がなくなるってのは、そうでもしなきゃ人間という種そのものが生きてこれなかったからかも知れん。ただでさえ俺たちは、考えなくても良い事を延々と考え、悩んでも仕方ない事をぐちぐちと悩むんだから。人間の心は過酷な自然の中を生きるには弱すぎるんだろうよ。

しかしその？弱さ？が悪いもんじゃないって事は、まあそのうち話すとしよう。王子の死を見届け、赤毛を引き連れて屋敷を脱出しようとして歩き出したその時の俺は、それを全く理解していなかった。赤毛の知らない一面を見ただけで動揺しちまった自分に、ほんと嫌気がさしていたんだな。俺は？弱さ？を否定する事しか知らなかったんだ。

とは言え、そう、行動を開始すればシンプルになる。再び館の中を走り始めた俺はいつもの俺で、ただのろくでなしに戻っていた。「まずは脱出。それについて異議はねえな？」

ちらりと背後に視線をやる。

割と速めに走っている俺に必死に着いてくる赤毛は幾らか息を上げてはいたが、苦しげな様子を一切見せず、はきはきとした返事を投げかけてきた。

「はい。誰がどのような目的を持って連合大使館を襲っているか不明な以上、ここにいて利益を得る事は何もありません」

リスクじゃなくリターンの方を優先して考えるやつは、大物かうつけ者と相場が決まっている。まあ中にはこいつみたく、その二つを掛け合わせたやつもいるんだがな。

「まあ、そうだな。大体、これほど大規模な傭兵の招集があると、

普通は役人が気づくんだよな。クーデターには警戒するだろ？ サ

ウダルーデなら尚更だ。火薬庫での喫煙は誰も許さねえしな」

「……もしかして、こうおっしゃりたいのですか」

勘の良い赤毛は声に緊張を滲ませた。

緊張？

いや、それだけじゃないな。

「これは帝国の総意である——と」

興奮だ。

緊張よりもそっちの方が多かった。今にも笑い出しそうな狂った
気配が背後で蠢いている。いや、ひよつとすると声にしなだけで
既に笑っているかも知れん。俺はおっかなくて振り向く気も起きな
かった。

「そうは言ってねえよ。これが帝国そのものの計画であれば、傭兵
みたいなゴロツキを使うのはおかしいからな」

「なるほど。そうなると、憲兵の動きを抑える事が出来るほど軍部
を掌握している人間、その独断という事ですか」

「さあな」

うきうきと聞き返してくる赤毛に嫌気がさして、俺は質問を適当
に流してやった。

だが実際のところ、赤毛が口にしたとおりの事を俺も考えていた。
先に挙げた理由、すなわち本来不可能なはずの大規模な傭兵の招
集が可能だったという事実、それに加えてもう一つ、その予想を裏
付けする事実がある。

三十分。

就寝中に襲撃を受けてから、廊下を走っている今この瞬間までに
経過した時間は、大体それくらいだった。

おかしい話だと、そう思わないか？

帝国の憲兵はおしなべて優秀で、サウダルーデにおいては殊更、
一ヶ月の犯罪件数が十以下に抑えられているほどだ。通報してすぐ
に憲兵が駆けつけ、圧倒的な勢いで全てを鎮圧する。その現場を目

にした事がある者は、どれほど犯罪行為に興味を持とうとも、まず間違いなくまっとうに生きることを誓う。

犯罪に対して容赦という言葉を知らない憲兵が、三十分という長い時間が経過した今、ここにはいない。

これほどの騒ぎが通報されていないなんて事は、まずありえない。良くも悪くもしっかり監視されている大使館は、町中よりもよっぽど安全で、犯罪から最も遠い空間なのだから。

もう解るよな？

俺が何を言いたいか、解ったはずだよな。

「グーデル様。道をお間違えです。さっきの角を左に曲がらないと」赤毛はあれだ。

テンション上がりすぎて状況がいまいち解っていないらしい。

なんつーかな。

俺はそれが無性に悔しかったんだ。

「玄関から出られるかよ馬鹿野郎！ 完全武装した憲兵どもが待ち構えてるかも知れないんだぞ！」

半泣きになっちまった。

でもよ、可哀想なこの俺を一体どこの誰が笑えるって言うんだ？ もしそんなやつがいたら俺がぶつ殺してやるよ！

「私は馬鹿でも野郎ではありません。どういう意味です？」

「やっぱり馬鹿野郎じゃねえかクソッ！ お前は黙って俺に着いてくれば良いんだよ！」

「この状況でプロポーズですか。困ります。後日改めてお願いします」

「うっうっう」

「グーデル様。泣かないでください」

違っ。

違っぜ。

言っとくけどな、あんた。

俺は三十過ぎにもなって号泣したりはしねえよ。これは生理現象

なんだ。俺にはどうにも出来ない事なんだよ。別に悔しいとか悲しいとかいう理由で涙を流しているわけじゃねえんだ。

「あ、なるほど。屋敷内の生存者は全て加害者であるとしておけば、傭兵も目撃者も目障りなものは一気に消せるわけですね。さすがグーデル様、荒事には慣れていらっしやいますね」

そ、そりやあまあ、ちよつとはソツチ系の理由もあるかも知れんがな、大体の原因は感情云々じゃなくてこの煙が、

ん……煙？

「野郎！ 火イつけやがった！」

「確かに、ちよつと煙たくなってきましたね。焼き殺すつもりなのでしょうか」

「あああ！ 何でお前はそんなに余裕なんだよ！？」

「だってグーデル様がどうかしてくれるのでしょうか？ 心配するだけ損じゃないですか」

「ふふふ。どうしてくれようかね、このお嬢様はよ」

だがまあ、俺が何を言っても赤毛は赤毛のままだろう。やっても無駄な事に挑戦するほど俺は若くない。上手く生き抜くコツを学んじまった俺は感情をさつと放り出し、代わりに赤毛を抱き上げた。

俺の左脇から頭をはやした赤毛が、楽しげに笑う。

「あら、楽ちん」

「デメエは黙ってる！」

速度を上げる。

赤毛と一緒にちんたら走ってたら、あっという間に燻製になっちゃう。幸い赤毛は小柄で軽い、持って走ったところで足枷にはならない。しかし厄介な事が一つだけあって、

「あ。グーデル様、武器を持った小汚い男が二人、進行方向に立ちふさがっていますよ」

「見えてるに決まってるだろ！ お前は齒ア食いしばってる！」

これだよこれ。

何て運がないんだ俺は。

敵なんか一切出て来ずに、真っ直ぐ脱出し得る可能性だって十分あっても良いのに、何でもこう厄介事が重なるんだ畜生！

通路の先でうろつく傭兵然とした連中と目が合う。俺は走りながら悲しげな笑みを投げてやったよ。

それをまるで無視した連中は、対角線を結ぶ形に間隔を開け、無言で腰を落とした。手にした得物がこちらに向けられるのを見ながら、俺は手の中の赤毛をくるりと回し、片腕で肩の上に担ぎ上げる。剣を鞘から引き抜いた俺は、自らの不運と顔の隣にある赤毛のケツに腹を立てた。どっちかをぶった切りたい気分だったが、もちろんどちらにも出来るはずがなく、仕方ないのでクソ野郎どもに怒りを叩きつける事にする。

二人の内の片方、手斧片手に向かって左側から襲いかかってきた野郎に、足を止めぬまま、剣を一閃する。

手斧を握った野郎の右腕が血を撒き散らしながら宙を舞う。悲鳴を背後に聞いたときには、二人目の野郎が俺と赤毛を一度に両断するべく、反りの深い刀を上段に振り上げていた。向かって左上から、袈裟懸けに振り下ろされたそれに、やはり足を止めぬまま、俺は自らの剣を軽く触れさせる。

手斧野郎の腕を切つてすぐ、速度重視で伸ばした剣に力が入っていない。が、俺は最初から刀を弾くつもりはなかった。

刃と刃が触れた瞬間、俺は剣を僅かに手前に引いていた。同時に手首を素早く、しかし柔らかく返し、野郎の刀の軌道を緩やかに変更する。刀は赤毛のケツと俺の頭の僅か上を通り過ぎ、何もない虚空のみを切り裂いた。

刀を振り抜き死に体となった男の胸に、足を止めぬ俺の肩が接触する。グギリと胸郭を軋ませながら男は吹き飛び、道を譲る。俺は最初から最後まで足を止めぬまま、連中の傍らを通り抜けた。

どうだ。俺も大したもんだろ？

内心ハラハラドキドキだったが、持ち前の渋いポーカーフェイスでやり遂げた自分に、俺はスタンディングオベーションを送りたい

気分だった。まあ、走っていたし、両手もふさがっていたから鼻で笑っただけだったんだけどな。

が、クソ忌々しい事に、赤毛は俺の神業に何の感銘も受けなかったらしい。

「グーデル様。私の顔を前に向けてください。後ろに走っていくようにで気分が悪いので」

「あーはいはい解りましたよ、お嬢様！」

俺は剣を荒々しく鞘に収め、言われたとおりに赤毛の身体を回転させる。そのついでに薄い胸でも揉んでやろうかとも思ったが、そうするとなんだか負けた気になりそうなので止めておいた。

「それで、グーデル様。玄関から脱出しないなら、一体どこから出るんですか？」

いけしゃあしゃあと尋ねてくる赤毛に俺は舌打ちをし、ちょうど通路の先に見えてきたそれを指さして見せた。

「あそこからだよ、あそこ！」

「ですがグーデル様。私には廊下の突き当たりにはしか見えませんが、秘密の通路でもご存じですか？」

「デメエ、今俺の事馬鹿にしゃがったな！？」

「被害妄想ですわ。それで、一体どうするつもりなんですか？ あそこには何もありませんけど」

「お前の目は節穴か。ちゃんと窓があるだろうが」

「窓……あの、グーデル様。申し上げにくいのですがここは二階ですよ。人はこの高さから落ちたら、まず間違いなく死ぬんです。解りますか、グーデル様」

左脇に抱えた赤毛が、どこか劣るような優しげな瞳で俺を見上げてくる。

馬鹿なガキを見る母親のような瞳で、だ。

「ふざけんな！ んな事ア解ってるんだよ！ 窓の外にだけえ木があるんだ、それに飛び移るって言ってるんだよ！」

例の習性だ。

昨夜の晩餐の後、俺はトイレに行くと称し、万が一の時のために屋敷から逃げ出せるルートをいくつか見つけておいたのだ。その折目にした屋敷のすぐ側に植えられたでかい木、それに飛び移れそうな窓があゝの窓——と、もう？この？だな。

苛々している間に廊下の突き当たりには辿り着く。いい加減走り疲れた足を止め、赤毛を床に立たせた。

「俺の背中につかまれ」

件の窓を開けながら顎でくいつと促すが、赤毛は俺の要求に従おうとしなかった。やつは顔を強ばらせたまま窓に近寄り、その向こうに広がる夜の闇を覗いた。

「遠い、ですよ。控えめに申し上げて、届かないと思います。第一、真っ暗でよく見えないし……」

ぞっとしたように赤毛が呟いた。

その顔はあれだ。

サーカスのイベントでよ、「お客様の中で、誰かお手伝いしてくれる方いらっしゃいませんか」とかいうのがあるじゃねえか。ガキとかテンション上がったオバサンとかが勢いよく手を挙げるあれさ。それを例にするなら、こうなるな。

手を挙げた訳じゃないのにステージに無理矢理連れて行かれ、しかも手伝わされる品目が空中ブランコだった。赤毛の顔は大体そんな感じだった。

いや、実を言えばな。

俺も似たような感じだったんだよ、うん。でもさ、俺がびびるわけにはいかないだろ？ だから俺は赤毛の肩をポンと叩き、陽気な口調で言っちゃったんだよ。

「んな事ねえよ！ ちょっとした冒険さ。終わってみれば、きっと楽しい思い出の仲間入りさ。またやりたくなっちゃうかも知れないぜ？ ハハハハハ！」

「グーデル様。声がしっかりと裏返っていますよ。それに肩に乗った手から震えが伝わってきます」

「ぐちぐち言つてねえでさつさと負ぶされ。煙がやばいし、かなり蒸し暑い。きつともう一階は火の海だ。俺は水死と焼死はゴメンなんだ」

俺は余裕を失った。

首筋から吹き出し始めた汗を手で拭い、嫌々ながらちらりと後ろを振り返った。

廊下は既に煙のパーティー会場と化しており、奥の方は全く見えない。煙の臭いを感じてからほとんど時間は経っていないのに、既にこの有様だ。火事の最も恐ろしい点は熱でも煙でもなく、その圧倒的な速さなのだ。

あと五分もすれば屋敷の支えが燃え崩れるだろう。と、自分で下したその見解に、俺は居ても立ってもいられなくなった。

「悪い。先に行く」

窓から飛び出そうとした俺の肩は、しかし赤毛の手でがっちりと捕獲される。

何故だか笑顔になりながら、俺はゆっくりと赤毛を振り返った。するとそこには獅子が一頭、鋭い牙を剥いていた。

「この次一人で逃げようとしたら突き落とします。よろしいですか」「はい」

背筋が汗でじつとりと濡れた。もちろんその原因は火事ではない。火事の方がまだ可愛かった。

赤毛と火事の板挟みになった俺は、故郷の歌でも歌おうかと考えた。とびきり陽気なやつさ。でも最後に歌ったのは大昔、咄嗟には出てこない。代わりに頭に浮かんだのは『おくり歌』だった。

ああ、死者を送る葬式の歌だよ。

「かーみのーみもーとー……」

虚ろな顔で歌い始めた俺の背中に、軽い衝撃が加わる。首だけで後ろを振り向けば、すぐ近くに赤毛の顔があった。俺の首に絡みつく二つの細腕にぎゅっと力が込められる。

「どうぞ。飛んでくださいませ」

否。それはただの死神だった。

俺は笑ったよ。

自分じゃ見えないが、きつと綺麗な笑顔だったと思う。

何だろう、きつと軽くなったんだな。全ての悩みから解放された、解放されちゃったんだ。だからそう、俺はごろつきの傭兵でも、ひねくれ者の中年でもなく、その瞬間、名前のない一人の人間になったんだよ。自由になったんだよ。

俺は窓からゆっくりと離れ、十分な助走距離を稼いだ。目を瞑り、深い深呼吸を何度も何度も繰り返した。

ビシリ。

屋敷の何かにひびが入る致命的なその音が、スタートの合図となった。

俺は目を開け、走り出した。

屋敷が崩れていく轟音が背中を叩いたが、俺は全く気にならなかった。ただひたすらに足で床を蹴り上げ続け、そして遂に窓枠に足をかけた。

俺は闇に舞った。

瞬間、生まれてから今までの様々な記憶が蘇った。他人に誇れるような人生では決してなかった。良かったと言える事なんて、片手の指が余るほどしかない。他人から見れば、きつとろくでなしの人生でしかねえんだろうよ。

でもな、まあまあ悪くなかったぜ。

俺はそう言ってる。

虚勢に過ぎないんだとしてもな、俺は地獄の門番に会ったらそう言ってる、その顔に唾を吐きかけてやるよ。

それが俺。

ベイン様なんだからな――。

「あはは！ 確かにちょっと楽しかったですね！」

木の幹にへばりついた俺の背で、死神がケタケタと笑っていた。
俺は泣いた。

訳もわからず、無言で涙を流し続けた。

なあ、あんた。

あんたなら解るか。

俺は今だに解らないんだよな。この時の俺は、自分がまだ生きてる事が嬉しくて泣いたのか、それともまだ生きなきゃならん事が、背中の死神と踊らなきゃならん事が悲しくて泣いたのか。

あんたなら解るかい？

その時の俺は、やっぱり答えが出なかったからな、泣き止むために仕方なく自分にこう言い聞かせたよ。

きつと煙が目染みたのさ————ってな。

第十二話

「憲兵つて、思ったよりも仕事熱心なんですね。もう朝ですよ」

「証拠は一つも残しちゃまずいからな。当然なんだろうよ。むしろ俺たちが見つからなかった事の方が奇跡だ」

「奇跡なんかじゃなく、ただの一つの結果に過ぎませんよ。彼らは屋敷の内側のみに気を取られ、木の上に誰かいるとは思わなかっただけ。暗くて視界が悪かったというのも、要因の一つでしょう。大した事はありません」

「マジでお前可愛くねえな。日頃の行いが良かったんですね、くらい言えよ」

「いくら善行を重ねたところで神は応えてはくれません。それに私の日頃の行いは決して良くはありませんし」

「……なんだか家に帰りたくなってきた」

「私はホテルを探してシャワーを浴びたいですね」

「俺は身体と心を休めたいな。誰かさんのお陰でボロボロなんだぜ、実はよ」

「神に会ったら伝えておきますわ」

「……………」

俺たちが木から下りることが出来たのは、空が白くなり始めた頃だった。

飛び移った木が高く、そして枝が頑丈だったお陰で、何とか捕まり続ける事が出来た。が、もちろん容易な事ではない。小柄な赤毛はともかく、大男じゃないにしろ、立派な成人男性であるところの俺は、それはもう大変だった。

庶民や理解できない、偉大な芸術家連中が制作した奇怪なオブジェ。

太い枝の間に手足を引っかけ、身体を広げた俺は、そういった存

在になりはてていた。後数時間下りるのが遅かったら、俺も後世に名を残す芸術家の仲間入りをしていたかも知れん。

でもまあ、俺が目覚めるよりも憲兵達が引き上げる方が幾分早かったわけだが。

「狂うって案外難しい事なんだな」

「何か言いました？」

「いや。何でもねえよ……」

広大な焦土と化した大使館を一瞥もせず以後にした俺たちは、宿を探して廃墟のようにひっそりとした町の中を歩いていた。犬の鳴き声すら聞こえず、耳に入るのは俺たちの足音ばかりである。

歩く俺たちに会話と呼べる会話は無い。

本来なら今後の予定について可及的速やかに話し合うべきだが、俺も赤毛も寝不足と疲労で頭が働かなかった。

赤毛は見た目こそいつも通りだが、その声には覇気、もとい狂気がない。心なしかその青い瞳も曇って見える。所詮十歳ちよつとの小娘、体力が底を尽きかけているのだらう。俺は頭こそ回らないが、身体の方はまだまだ無理が利く。いつかの戦場じゃ、眠りながら剣を振るったもんさ。それに比べればこの程度、酒に酔った女を押し倒すくらい造作もねえ事だ。

ああ、そついや最近そつちもご無沙汰だ。誰か凍えた俺の心を温めてくれよ……。

「早くしろ！ 急がないと間に合わなくなるぞ！」

豊富な女体に思いをはせていた俺は、突然耳に飛び込んできたその怒鳴り声に、咄嗟に赤毛を抱き寄せていた。

剣を引き抜きながら、慌てて五感を研ぎ澄ませる。

「グーデル様。申し訳ありませんが、路上で押し倒されるのは趣味じゃありませんの。ホテルについてからにしてください」

「趣味じゃねえのは俺様の方だ！」

盛りのついたガキにうんざりするような目でこちらを見た赤毛に、俺は思わず腹の底から怒鳴っていた。

いや、俺は寛大でクールな男だぜ？

勘違いしないでくれ、キレやすい方じゃねえんだ。でもまあこの時は寝不足でよ、理性の方がちよつとばかしがさついていたんだよ。だからまあ、その、なんだ。

怒鳴り声にはちよつと殺気が混じっちゃたりしていてな。

「ヒ、ヒイイイ！ ど、どうか、お、お許してください！」

悲鳴だよ。

しかし赤毛のじゃないぜ。

やつはうるさそうに顔をしかめた後、俺に抱かれているのを良いことに、そのまま身体を預けて目を閉じやがった。聞こえてくるのはネ、イ、キ！

「テメエエエ！ 良いご身分だな、アア！？ 寛大でジェントルマンな俺も、さすがにキレルぜ畜生！ オラ、額を地面にこすりつけて許しを請え！ 私は卑しい豚です、あなた様のクソを喰って生きるクソ豚です、どうぞクソとお呼びくださいってなア！」

「ヒツ、わ、私は卑しい豚です！ あなた様のクソを喰って生きるクソ豚です！ どうぞクソとお呼びください！」

「良い調子じゃねえかクソクソクソ！ 豚なら豚らしく悲鳴を上げて見せろ！ 下手クソならこの場でそん首切り落とすぞコラア！」

「ブ、ブヒイイ！ ブヒツ、ブヒヒツ！ ブヒイイイ！」

「もつと鳴け！ テメエのクソさ加減を世界に知らしめろ！ そんなもつてその次はよオ」

「……グーデル様。眠れません。静かにしてください——あら、そちらの男性は何をなさってるんですか？」

「ああア！？ 決まってるんだろ、こいつはクソだからクソに決まってるんだろ！ ほら、ケツ出してクソを放り出して見せろよ——
——って、あれ………？」

人生でトップテンに入るほどの良い笑顔を作り、朝焼けに染まる

薄桃色の空に剣を振り上げたところで、俺はようやく正気に返った。腕の中の赤毛を見下ろし、赤毛が訝しげに見つめる方向へと視線を投げた。

そこには見知らぬ中年ハゲが一人、朝日を背に負い、凄まじい形相でズボンのベルトに手をかけていた。

凍り付いたように動かない男と目を合わせ、俺は首を傾げた。

「ひよつとして、お楽しみの最中か……？」

「あんたがやれって言ったんでしょーがッ！ あんたがッ！」

「そうだっけ」

赤毛に目をやると、頷きが一つ返ってきた。俺もまた頷きを返し、高く振り上げていた剣を腰の鞘に戻した。

「さ。宿を探そう。どこが良いかなあ？」

「ちよつと待てエエエー！」

赤毛の肩を抱き、歩き出そうとしたところで、ハゲが俺を呼び止めた。自分に優しく、他人にヨロシクを密かなモットーにしている俺は、無視する事なく後ろを振り返り、寛大な笑みを浮かべて頷いてやったよ。

「安心してくれ。俺は被害者だ」

「何を言ってるんだ！？ さっぱりだ！ さっぱり解らんぞ！ 安心も出来ないしあんた、被害者じゃないだろ！ 十割超加害者じゃないか！」

「おいおい。落ち着けよ。こちらのご令嬢が気分を害しておられる」

「面白い見せ物ですわね」

「……ほら、彼女もこう言ってる」

「あ、あんたらなあアア——！」

朝日を浴びて光り輝くハゲの頭から、白い湯気がいくつも上がったいく様は、ああ、ガキの頃教会で見た宗教画を思い出したよ。天へと続く道。確かそんなタイトルだった。

そのあまりの荘厳さに、宗教心がないはずの俺が思わず十字を切りそうになったところで、路地から人影がいくつか飛び出してきた。

「あ、あなた！　良いから行きましよう！」

「そうだよお父さん！　急がないと兵隊さん達がやってきちゃう！」
ハゲより幾らか若い感じの女と、ハゲと女を足して二で割ったような面をしたガキだった。

ん？　ああ。

大丈夫、ガキはハゲじゃなかったよ。将来は知らんがね。

え？　聞いてない？

「う、そ、そうだった！　急ごう！　荷物は持ったか！」

二人の言葉を聞いたハゲは、今まで怒りで赤くしていた顔を、今度は緊張と恐怖で青くしやがった。

一瞬で怒りを忘れたって感じのその光景に、俺の鈍っていた頭が微かに反応した。

「ええ！」

「うん！」

「それじゃ行こう！」

今まさに背を向けて走り出そうとしたハゲの喉元に、俺は一瞬で鞘から引き抜いた剣の切っ先を突きつけた。

悲鳴を上げる親子の顔を順に睨み付けながら、俺はドスの利いた声で囁いた。

「お前達は何をそんなに焦ってるんだ。どこに向かおうとしている

—— 答える」

脂ぎった喉の皮膚を薄く切り裂くおまけ付き。痛みは大したことないが、その効果は抜群、ハゲは売春宿の客引きみたいにせわしく舌を動かし始めた。

「せ、戦争が始まるからです！　わ、私達はこの町から脱出しよう
と！」

「……戦争？」

顔をしかめた俺に代わって口を開いたのは、傍らの赤毛だった。
ハゲを睨む青い瞳は、いつものようにギラついている。

「それはどこから手に入れた情報ですか？」

「ど、どこも何も、連合の大使館警備兵と、帝国の治安維持部隊が、ついさつき、ええ、ついさつきですよ！ 和平記念広場でやりあつてたじゃないですか！」

「——あなたは目撃でしたんですか、それを」

「見ちゃいけないけど、音は聞いたよ！ 見た人間だつて何人も知ってる！ ここいらじゃもうほとんどが人が町を出たんだ！ ああ、あんたらがどっち側の兵隊か知らないが、荷物ならあげるから私達を見逃してくれ！」

ガキが泣き始めたのを聞いて、ハゲはとうとう耐えきれなくなつたらしい。喉を先ほどよりも深く切り裂かれるのも構わず、ぱつと荷物を放り出すと家族二人の肩を抱いてあつという間に走り去ってしまった。

ハゲの剣幕にというよりも、ハゲが口にした内容に圧倒されたていた俺は、逃げる連中を呼び止める事もせずに呆然とその背を見送つた。

「始まりましたね。予想よりも早かったです」

淡々とした赤毛の言葉に我に返る。

あり得たはずの未来。

しかしこんなになさぐにやつて来るとは思つていなかった現実。

朝に抱かれる人氣が一切存在しない町の中で、自分がどう行動すべきか一瞬解らなくなつていた俺は、ただその事実を声に出さず呟いた。

平和が終わり、戦争が再び始まつた——。

第十三話

それからの俺の行動は迅速だった。

出しっぱなしだった剣を鞘に叩き込むと、猛禽のように鋭い目つきで周囲を見渡し、一瞬の間に獲物を一匹見繕った。

「グーデル様、どこへ……」

走り出した俺に赤毛が慌てて声をかけてくるが、俺にはそれに答える余裕がなかった。戦争が始まった今、すぐさまやるべき事が一つある。

それが何であるか、あんたは解るか？

ヒントは三つ。

- 一、この区画に残っているのは俺たちだけであるという事。
- 二、治安維持を担う憲兵どもも今は出払っているという事。
- 三、この俺ベイン様が？どちらかと言えば？悪党であるという事だ。

どうだ、これでもう解っただろ？

「グ、グーデル様……、まさか、私を置いて逃げるつもりじゃ、ないでしょうね——」って、ひょっとしてそれは火事場泥棒というやつですか……？」

俺が飛び込み、息を荒げた赤毛が後を追って入って来たのは、街角にあった大きな雑貨屋。

もちろん無人だ。最高だ。

もう少し時間的猶予があれば、もっとゴキゲンだったんだが仕方がない。幸運に巡り合わせただけでも、テメエの日頃の行いに感謝しないとな。まあ、赤毛ほどじゃないにしろ、俺のそれも生乾きのクソみてえなもんなんだがな。蠅も寄りつきやしねえ。ははは。

俺はニコニコ顔で日持ちしそうな食品や缶入りの油、良く燃えるマッチといった色々と役立ちそうなものを、同じく店の商品の一つである頑丈なりユックサクに、片っ端からひよいひよいと詰め込

んでいった。口までいっぱいになったところで、商品棚の間から絶句して俺を眺めていた赤毛に、小型の豚くらいまで膨らんだそいつを押しつけた。

「ほれ、お前の分」

返事は待たず、今度は自分の分を詰め始める。あっという間にリユック二つをぱんぱんにしたところで、赤毛がため息と共に言ってきたよ。

「随分と楽しそうですね」

「俺のささやかな夢だったからな。オトコノコなら誰だって思い浮かべるんだよな。こーゆー事はよ」

「何気なく自分を正当化するのはどうかと。私の知り合いの男性には、年齢を問わず、そのような事を考えていらっしやる方は一人もいませんでしたよ」

「俺だって誰にも言ったことねえよ。それにそいつらちゃんと男だったのか？ タマ確認しねえとどっちか解らんのだぜ、嬢ちゃん。俺も昔そいつを怠ったせいで、人に話させない酷い目に遭った事があるぜ……」

「確かにその方々のズボンをずり下げた事はございますが。まあ男性とは言え、もし殴り合いになっても、私にも勝てそうな方ばかりでした」

「タマどころか、なけなしのプライドまで壊してやるなよ。男ってのはな、見かけよりもずっと弱い生き物なんだぜ。オレツのコツコ口はガッラス製——つと、これくらいで良いか」

三分ほどで計四つの鞆を豚に変えた俺は、胸の内に温かい満足を覚えながら、それらを優しい瞳で見下ろしていた。初めて自分の子供を持った父親は、きつとこのような言葉に出来ないシアワセを味わうんだろつなど、俺はらしくない事を考えたりもしたよ。俺は四人の幼子を抱き上げ、胡散臭そうに俺を眺めていた赤毛の産婆に高らかに告げた。

「さあ、家に帰ろう！ こいつらにあの緑の丘を見せてやるんだ！」

「……町を脱出して丘陵に向かうんですね、解りましたわ」
産婆は盛大にため息をついた。

第十四話

解ると思うが、俺はガキのようにはしゃいでいた。

その理由にはもちろん、無人の店で好き放題物を盗む事が愉快だったからつてのものもある。でもそれだけじゃない。戦争が再び始まったつていう現実味の欠片もない事実、しかし認めなきゃならないその事実、俺の懦弱な精神が悲鳴を上げていたのさ。

あんだだつてそういう経験はあるだろう？

想定もしていなかった困難な状況に陥り、どうしていいか解らなくなつた時、愉快でもないのに笑つちまうようなやつだよ。ひたすらに気分がハイになつちまつて、体力が切れるか、現実が選択を迫つてくるまで、気でも狂つたように暴走を続けるんだ。大抵は一過性のもんで、やがては火が消えたようにはつと正氣に戻るが、中にはそのまま向こう側に逝つちまうやつもいる。戦場じゃ割とよく見かけるぜ。罪の意識に耐えられなくなつたウブなやつが、けたたましく笑いながら敵に向かつて突撃するんだ。時々仲間に向かつてくるやつもいる。そういう時はみんな慣れたもんで、肩をすくめて野郎の股間を一撃するんだ。すると笑つちまうほどあっさりとは正氣に戻るんだから、オトコつてのはつくづく情けないよな。

俺は、と言うと、実は初めての経験だった。

若い時から器用な質でな、どんなやばい状況でもするりするりと身を躲してきたのよ。器用な臆病者つてやつは、おかしくなつたりはしねえんだよな、勘違いしてるやつも多いけどよ。

じゃあ何故ぶつ飛んじまつたか——は、あんなら聞かなくても解るだろう？

そう。その通り、赤毛の悪魔だ。

やつは俺のささやかな平穏を完膚無きまでに破壊し、破壊し続けている。その上寝不足で神経がすり減つてるんだぜ？ 開戦なんて言う刺激的すぎるスパイスを頭から振りかけられれば——ボンツ、

だ。

「ハハハハア！ 見ろよオイッ！ ガラスが木っ端微塵だぜ！」

「グーデル様、物を放り投げるのはお止めください」

「けちくさい事言つなよ！ ほら、お前も投げてみるよ、な？ 楽しいぜ？」

「結構です」

「ほら、この鉢植えなんか良いんじゃないか？ 良く飛びそうだが。あつちの屋根が良いな。風見鶏、見えるだろ。な、一発すかつたやつてみ……」

「怒りますよ」

「……………」

何でだろうな。

俺と赤毛の会話は大抵この流れになる。

赤毛が刺して、俺が凹むんだ。そして俺はその度に人生を思い、幸せとは何かを考えるんだ。三十年ちよつとの時間の集大成がこれなのかつてな。乾いた笑みなんて浮かべて見せたりしてな、鼻をすするのさ。俺、哀れ。ざまあ見ろ、韻を踏んでやつたぞ。

「正気に返りましたか」

「それ以上だな……心が折れそう」

「人生において肝心なのは、折れない幹を育てる事ではなく、根を広く深く張る事だと、いつだったかディアヒムおじさまがおっしゃっておいりました」

「……あの変態野郎、一体何もんだよ……」
頭にディアヒムのにこにこ顔が浮かぶ。

が、精神上よろしくないためすぐに消す。以前見たときよりも幾分輝いて見えたよ。ああ、あいつを尊敬するようになったらなんだ、噴水のシヨンベン小僧が神に見えちまうだろうよ。魂の尊厳的にやつちやなんねえ。

ともあれ、俺は赤毛に心の股間を蹴り上げられ、それまでの意味不明なハイテンションを失った。さっきまでバラ色に見えていた町並みも、今じゃ人気がないだけのただの有象無象でしかない。雑貨屋からかつぱらった物が目一杯詰まっている背中のリュックサックが、途端に重くなったよ。死体でも入ってんじゃねえのかって具合さ。ああ、だとすると入っているのは俺の心の死骸に違いねえな……今度は逆に軽すぎねえか、畜生。

「しつかりしてくださいね、傭兵さん」

赤毛が壊れかけの人形を見るような目で俺を見た。ひでえ話だな。ぶっ壊したのはてめえのくせして、こっちが悪いみたいな感じなんだからよ。しかもあれだ、こいつの場合、壊れたからといって投げ捨てるような真似はしないんだよ。千切れかけた頭だの腕だのを縫い合わせて、また景気よくぶっ壊すんだ。

「泣いたら負けだよな……うん」

「そう、その意気です。ところでグーデル様、私たちは西門に向かってるわけですよ？」

「ああ、そうだ」

上を見つめ続けるのも疲れるが、下ばかり見るのも同じくらい疲れる。俺はとりあえず顔を上げる事にした。

「サウダルーデから西にあるジョジーニヤを知ってるか？」

「ええ。帝国領の町ですよ。ここほどじゃないですが、それなりに大きくて、何でも色々と？融通の利く？ところだとか」

「ああ、それだけ解っていれば十分だ」

俺は赤毛と並んで人気がない朝の町を足早に歩きながら、サウダルーデの小さな空を見上げた。

戦争が始まるというのがどういう事か。平和な時間を生きるあなたには解るか？

……いつ死ぬか解らない？

はは、そりゃあまあ、間違っちゃいねえよ。

でもあんた、平和な時分だって同じ事だろう？ 馬車にはねられ

る事だつてあるだろうし、強盗に刺される事だつてある。流行病にかかる事だつてあるだろ。確かに戦時中の方が死ぬ可能性が高いのは認めるがよ。でもな、やっぱりそいつは的外れだ。

次元が違ふんだよ。

死ぬとか生きるとか悩む余裕がねえんだ。

戦争つていうのはつまり、「確かなものが何も無い」つていう事実を、日和った人間どもにより強く認識させるものなんだよ。あんな、考えた事があるか？ いや、考えているか？ 一瞬後に自分のいる場所が砲撃で吹き飛ぶかも知れないとか、買い物に行ったら食い物が何一つ売ってないかも知れないとか、朝起きたら突然自分が奴隷になつてるかも知れないとか。平和な時じゃただの冗談でしかないような話だよ。

でもな、あり得るんだよ。

戦時中じゃ日常茶飯事、平和時だつて少なからずあり得るんだ。戦争が始まるつてのはつまり、てめえが立つてる地面が崩れるつて事なんだよ。気づけないやつ、気づいても認めないやつ、認めても行動できなかったやつ。そいつらはみんな、足場と一緒に真逆さまだ。途中で頭ぶつけてお陀仏か、どこまでもどこまでも落ちていくか。這い上がつてこれるやつもいるにはいるが、大抵はそのまま光も届かぬ穴の中で、おーしまい。

そうならないためには身軽にならなきゃならん。

精神的にな。

素早く思考し、素早く実行するんだ。

穴底に落ちながら何かするのは大変だから、まずは崩れにくい足場を探さなきゃならない。そこそこに安全で、それなりに食料の心配がなく、そして一番これが重要なんだが——新鮮な情報がたくさん集まる場所。俺が記憶している中で、その条件に一番合っているのがジョジーニヤだった。

「あそこの領主は根性がどうしようもねえほど腐ってるが、バランスをとるのに長けている。外交にしろ、内政にしろな。嫌らしさを

考えなければ、賢明だと言っても良い」

「領主と言いますと、確か女性の……なんと言ったかしら。ですがグーデル様、その様子ですと、ひょっとしてその方とお知り合いなのですか？」

あからさまに訝しむ赤毛に、俺は顔を歪めながら頷いた。

「まあな。あのクソアマには貸しがあるんだよ。でもそいつについて詳しくは聞くな」

「どうしてですか？」

「俺という人間が三日ばかり使い物にならなくなる」

「……面白そうですが、聞かないでおきますね」

「おう」

ふ、声がうわずつちまったぜ。

ちよっとおなかも痛くなってきたよ。俺ってばどんだけトラウマになってんだ。しかも仕方ないとはいえ、これからそのトラウマに自ら向かっていくって言うんだから、俺もつくづく不幸だよな。

鬱になりかけた俺を案じたのか——十いくつのガキに心配されるおっさんってどうなんだ——赤毛がどこか明るい様子で話しかけてきた。

「西門をしばらく進んだ先の丘陵には、騎馬民族の集落があるんですよね？」

「あ、ああ、そうだ。交渉して馬を駆りようと思ってるんだよ。大陸馬車連盟は耳が良いから、既に業務停止を決定しただろうし、ジョジーニヤに行くのに足が必要だからな」

ここからジョジーニヤに向かう場合、四頭立ての馬車なら一週間にかかる。歩けば二ヶ月はかかるだろうし、何より盗賊が厄介だ。俺一人ならこそそやってりゃ問題ないが、今回は赤毛が一緒だ。安全的にも体力的にも徒歩は不可能、馬がどうしたって必要になるほど、と赤毛は頷いた後、頬を紅潮させて照れたように笑った。

「ふふ、私は最初、グーデル様が丘に向かうとおっしゃった時は、

ああ、族長を倒して民族全体を征服し、戦士達を率いて帝国軍を討ち滅ぼす気なのかと思ったのですが、どうやら違ったようですね」

「——え？」

俺は一瞬足を止めそうになった。が、赤毛がずんずん歩いて行くため、それこそブリキの兵隊のごとく、ぎこちなく足を動かし続けた。赤毛の横顔をおそろおそろ眺めてみると、年相応にはにかんだままだった。俺はそのあまりの可愛らしさに愕然とした。

オレ、コイツガドウシテレテルカワカラナイ。

「あ、西門が見えてきましたよ」

言葉と思考を失っていた俺は、赤毛の声に我に返った。我に返るついでに今見たものを記憶から投げ捨てた。実は俺、戦争が始まる前から戦場にいたんだな。

俺は諸悪の根源である赤毛から目を逸らし、前方へと顔を向けた。

「あー、やっぱりか」

俺はため息をついて足を止めた。

視線の先、サウダルーデをぐるりと囲むバカ高い城壁の切れ目、これまた巨人でも通れるんじゃないかってくらい巨大な門の周辺には、多数の人影が存在した。

「武装してますが……正規の兵士ではないようですね」

同じく足を止めた赤毛が、頬にまだ赤みを残したまま、小さく首を傾げた。

「ゴロツキが町から逃げ出そうとする人々を襲ってるんでしょうか」

「まあ、そんなところだろうな」

やれやれと首を振る。

西門に集まっているのは……ああ、やっぱり俺の同業者みたいだな。小汚ねえ格好をした連中が、逃げ遅れた哀れな町民達に片っ端から襲いかかっている。町民達は荷物がいっぱいでろくに動くことも出来ないうちに、剣だの斧だので斬りつけられていた。襲う方も襲われる方も、数が少ないのがせめてもの救い……なのか？

でも何て言うかな、身内でも知り合いでもないけど、やっぱりこう

いう時はちょっと悲しくなるぜ。連中も俺を見習ってクールかつストイックに、一般人には手を出さず、店で盗みをやるべきだとは思わないか？

「グーデル様と同じような感じですね。なんだか親近感が湧きます」
赤毛は間違ってる。

あんたもそう思うよな……間違ってる、そう言ってくれ。

「どうします？　そろそろ兎の方が全滅してしまいそうですけど。
若い女性もいらっしゃるようですから、色々と時間はかかるかも知れませんが」

てめえも女の一人のくせに、心底どうでも良さそうにそう呟き、
赤毛はくるりとこちらに顔を向けた。青い瞳には期待がいっぱい詰まっていたよ。

「やっぱり皆殺しですか？」

「自重しろ！　この人でなし！」

「ですがグーデル様。人間なんてろくなものじゃないですよ？　違いますか？」

「だとしても、だ！　あ……くそ。連中こっちに気づいたじゃねえか！　お前のせいだぞバカ女！」

「多分グーデル様の声が大きすぎたからだと思いますが」

「ああ、もう！」

俺は半泣きになりながら荷物を投げ捨てた。ああ、こういう時のために投げ捨てやすくしていたのさ。用意周到だが、何だろっ、準備が報われたのに全く嬉しくねえ。

剣を引き抜きながらふと考えたよ。

あれ、戦場でもこんな頻度で剣を抜いた経験はなくねえか？　しかも町中ばかりだぞ――。

賢い俺は考えない事にした。

「あ、グーデル様。女性が二人こちらに走ってきますよ。なんだか助けを求めているみたいですが」
「みたいだな」

「やっぱり皆殺しですか」

「どうしてそうなるんだお前はよ！」

二人とも暗い色のフードを深く被っていたので顔は見えなかったが、悲鳴と体つきはまさしく女のもの。片方が片方をかばうようにして、おそらく二人とも必死の形相でこちらに向けて走ってくる。

しかしまあ、距離が遠い上に女の足。ごろつきにすぐに追いつかれ、石畳の上に組み敷かれる。片方の女のフードがめくれ、そこから長い金髪が零れた。

悲鳴が一際大きくなるが、俺は面倒だったのでその場に突っ立っていた。助けてやれとか言うなよ？　ボクは暴力は嫌いなんだヨ。

「あれ……まさか……」

服を引き剥がされていく金髪女を顔色を変えずに眺めていた赤毛が、突然、驚いたように呟いた。

「どうした？　はは、ひよつとして知り合いかなんかか？」

俺は肩をすくめて笑ってやった。

ああ、もちろん冗談だ。赤毛自身がこの町の知り合いはあの王子様だけだつと言ってたんだよ。第一こいつ、知り合いとか友達とかほとんどいなさそうじゃねえか？　もしいたとしても、関係を持っておけば色々と便利だとか、そういう理由だろうよ。じゃなきゃ俺のような奴隷——あれ、俺の尊厳どこに落としたっけな。

「グーデル様！　今すぐあの二人を助けてください！」

地面をきよろきよろしていた俺は、赤毛の叫びに近いその声にびくりと震えた。

「ど、どうした。マジで知り合いだったのか、あの金髪」

顔を引きつらせて尋ねると、赤毛は恐ろしい形相で俺を睨んだ。

「理由は後で説明します。今すぐ助けにいきなさい。さあ——」

「は、はいッ！　行って参りますお嬢様アアア！」

俺は猛々しく雄叫びを上げて敵に立ち向かっていった。

いや、情けない悲鳴を上げて逃げ出した。

ゴロツキを相手にする方がマシ、切れた赤毛の側にいるのに比べれば天国だった。

剣を振り上げ泣きながら走ってくるおっさんを見て、襲う連中、襲われる連中は果たしてどのように思っただろうか。義憤に駆られた臆病者に見えたか、あるいは花粉症に悩まされる勇者にでも見えたか。まさかちっこいガキにどやしつけられ、逃げてきたのだとは思わなかったに違いない。

悲哀と恐怖と後悔と絶望と憂いを乗せて、俺は手近な野郎の首に剣を振り下ろした。

なあ、ディアヒム。砂漠に根を張るには一体どうすれば良いんだ……？

第十五話

それからの俺の孤軍奮闘ぶりについては割愛する。

まあ、大体いつもと似たような感じだよ。斬ったり蹴ったり唾吐いたり。息が上がった真似をして、相手の油断を誘ったりとかだ。華麗にバツバツといった感じじゃない事は確かだ。

何だ、その不服そうな顔は。

あのなあ、殺し合いってのはダサイもんなんだぜ？ さあ、一つ稽古をつけてしんぜようと、芝居がかった事を言うやつもいねえ事もねえが、そんな勘違い野郎は大抵後ろから刺されて終わるぜ。イラッとするぞ、全く。俺だって何回……とと、何でもねえよ、へ。

しかし、なあ。

話は脱線するが、最近の娯楽小説の主人公つてのは、どうしてこうもビショージョが多いのかね。美男子の英雄は昔から良く出てきたが、子供の、しかも女となると嘘くさいのを通り越して笑っちゃうよな。俺は長いこと剣を振るってきたが、今まで一度もそういうたやつは見た事ねえぞ。女の凄腕剣士すらお目にかかった事はねえ。弓使いはそれなりに見たけどな。俺も人の言えた義理じゃねえが、みんなひどい面だったよ。ごついくせに微妙に女っぽいから、余計に不気味に……ああ、これもあまり話すべきじゃないな。連中の恨みはあんなのケツの毛よりも濃いんだよ。

美少女。

美少女……ねえ。

世間は何を求めてるんだか。きっと珍獣と同じで、見た事ないからつまらない幻想を抱いちまってるんだろうな。俺だって若い頃は華麗にバツバツに憧れてたくちだしな。人の目つてのは遠くを見るように出来てるのかも知れん。

想像を絶する美しい少女。

俺は別に、そいつに期待はしてなかったよ。女は三十過ぎから綺麗になっていくつてのが、俺の持論だからな。ガキなんて男も女も変わらねえよ。

だけど……はあ。

期待してなかったけどよ、これはあまりにもひどすぎる。美少女なんてくそ食らえ。人間は見た目じゃねえんだ。人間はよお、

「時間がかかり過ぎですね。次からはもっと手早くやってください」

「……人間はよお、やっぱり中身だよなあ……」

「何かおっしゃいます？」

「いや、何でもねえよ……」

俺は手にした血まみれの剣を、まだ暖かい死体の衣服で拭いながら、鉛のように重いため息をついた。油が綺麗に拭えたところで剣を鞘に戻し、傍らの極悪非道にちらりと目をやった。お疲れ様の一言もない。苦言を呈した後はもう用は済んだとばかりに俺から目を逸らし、何か思案するように唇に指を這わせたまま、どこかへと視線を注いでいる。やるせないものを感じながら、赤毛の視線を辿ると、その終点には地面にへたり込む二つの人影があった。例の女の二人連れだ。片方は俺のテンションをちょっとばかり回復させる素晴らしい格好になっている。

「それほど大きくはないが、美乳だな」

特に乳首が良い。

「どういった感想を抱いても結構ですが、間違っても手は出さないでくださいね。むしろ出来る限り優しくしてください」

ニヒルな笑みを浮かべていた俺に、赤毛が冷たい口調でそう言うてきた。状況が状況だ、さあ向こうの路地裏でイイコトしましょうなんてちつとも考えていなかったが（正直言えば半分くらい本気だった）、赤毛の顔に何かを企むような色を見つけた俺は、おそろおそろ疑問を口にした。

「お前……何考えてるんだ？」

「まだ途中までですが。あの金髪女性、見覚えありませんか？」

「いや、全く。あんな美にゆ……美人、一度見たら忘れないぜ」

片方の女に抱きしめられ、すすり泣き始めたそいつの顔をじっと眺め、俺は首を振った。

ほう、太もも悪くねえな。

「あの方、アルテ公国の第二王女です」

どうにかして尻が見えないかと首を左右に振っていた俺は、赤毛の台詞にびたりと制止した。制止したまま視線だけを赤毛に移し、声を殺して問いかけた。

「——マジで？」

「はい。マジです。五年ほど前ですが、連合国主催のパーティーで見かけました。会ってお話はしませんでした、間違ひありません。傍らの女性は侍女ですね。こちらにも見覚えがあります」

「ふ、ふうん」

どおりで美人なわけだ——ってそうじゃねえ。

アルテ公国ついたらあれだよ、あれ。軍事力は大した事ねえが、連合の資金運用を一手に引き受けるやり手国だっていう話だ。大戦初期、帝国の勢いに圧倒され、ほとんどの国家が恭順か滅亡の道を選ぶしかない悲壮な決意を固めていた頃、アルテは連合設立の旗を振ったモノトリス王国にいち早く賛同し、難題中の難題である資金確保をあの手この手を使ってやり遂げて見せたのだ。それは強力な軍隊を手に入れるよりも遙かに難しい事だ。アルテ公の手腕は神がかかりすぎており、実は強力な魔法使いなんじゃないかって、俺たち傭兵を含めた平民は半ば本気で話してるくらいさ。今も昔も連合の要であり、帝国が最も重要視しているのがアルテ公国——アルテ大公国なのだ。その姫様にまずい事でもしちまった日には、俺は殺してすらもらえないだろう。歴史に名を刻んじまうかもしれないねえよ、マジで。

と、首筋を濡らした冷や汗にぶるりと身を震わせたところで、俺はもっとまずい事を思いつき、はっと赤毛の顔を見た。

「お、お前まさか、まさかとは思うが」

「何です？」

「——あの姫様人質にして何かやらかす気じゃないだろうな」
神よ。

くそつたれの神様よ。

俺をてめえの奴隷にするなら今をおいて他にない。

さあ、迷える子羊を救え。

救ってくれ！

「グーデル様。勘違いなさっているようですが、私はそこまで馬鹿ではありませんわ。人質になんてしません」

イエエエエエス！

信じてたぜ、これからずっと信じるぜ。

俺は今日から羊だ、てめえだけの羊だ。もう豚のように鳴いたり
はしねえ。これからはメエエと鳴く。時々ヤギとこつちゃになっち
まうかも知れんが、そこはご愛敬だ、笑って許してくれよ。

いやあ、なんて良い気分なんだ！

もう酒も止める、女も買わない！ 傭兵も止めて畑を耕すんだ。

そしていつかは所帯を持つて、子供をつくる。犬を飼おう。大きな
白い犬だ。そうだ、名前はユツキーにしよう。きつとぶくぶく太っ
て可愛くなるぞ。俺の息子や娘がユツキーを抱いて、畑から帰って
きた俺に微笑むんだ。パパ、お帰りなさいってさ。俺は笑い、鍬を
置いて二人を抱き上げるんだ。そして幸せをかみしめながら、小さ
いが素晴らしき我が家に、

「奴隷にするんですよ、奴隷」

お——おやおや……おや？

「人質なんて生ぬるいですわ。骨の髄まで誑し込んで、私なしでは
生きられないようにするんです。心に首輪をはめて、鎖で引きずり
回してやりますわ。ふふ、襲われかけたただけであんなに泣いちゃっ
て。調教はそんなに必要なさそうだわ。五日もあれば十分かしら……
あっちの女は邪魔ね。始末した方が良くもしいわ……」

——ジーザス？

おい、ジーザス。シカトしてんじゃねえ。こつち向けコラ。
てめえ、この不能野郎。

こんな化け物地上にのさばらせやがって。何考えてんだ馬鹿野郎！
おまつ、お前よオ！

何なんだよ！ このままじゃ俺、新しい宗教始めちゃうよ！？

お前の商売敵つくつちゃうよ！？ 俺の神は酒もオツケーだし薬も
オツケーだ！ 女なんか抱き放題、やれやれもつとやれだ！ どう
すんだ！ 地上が滅びるぞ！

「グーデル様？ 目にゴミでも入ったのですか？」

「ん……ああ、うん。気にしないでくれ。それより俺さ、ちよつと
宗教始めようと思うんだけど、どう思う？」

「グーデル様。ものは創るより買うが易ですよ。欲しければ今あ
るものに乗っ取るべきです」

「はは、そうかあ。お前にはかなわないなあ」

「お望みでしたら今度手伝って差し上げますから、まずは彼女たち
の元へ向かいましょう。私は豪商の娘、グーデル様はその護衛。サ
ウダルーデには観光で来た。話は私が始めますから、グーデル様は出
来るだけ喋らないでください。解りましたか」

「仰せのままに、お嬢様」

「結構。では参ります。ついてきなさい、グーデル」

颯爽と歩き出した赤毛の背中を追って、俺は力なく歩き始めた。

——この女、俺の運命を人質に取ったんだ。

そんな事を考えた。

第十六話

リリーナ・ミデル・アルテ。

俺の上着を着た（赤毛の命令だよ、畜生）金髪女は、嵐のような勢いで感謝を言いまくった後、そう名乗った。その傍らの、瞳に警戒の色を浮かべっぱなしの若い女は、赤毛の言ったとおりに侍女だった。名前はランシエとかいうらしい。顔立ちはちょっときつめだが、金髪に劣らず美形だし、カラスの羽を思わせる黒髪が何とも色っぽかった。俺的にはこっちの方が好みだ。是非お近づきになりたい。

だがまあ、赤毛に喋るなって念を押されたわけだし、相手が相手だ。俺の膨らみかけたアレとかコレとかも、すぐに正気を取り戻したよ。俺は木偶人形よろしく、時折赤毛の話に尤もらしく頷きながら、今日の昼飯は何にしようかと考えていた。

「なるほど。それは大変でしたね」

「ええ。あつという間に屋敷に入り込んできて、私はランシエのおかげで隠し部屋に逃れる事が出来たのですが……叔父様や叔母様、使用人達は——」

お姫様はアメジストを彷彿とさせる紫色の目に涙をためた。侍女が肩を優しく抱いてそれを慰めると、健気に何度も頷いて見せたよ。いやあ、良いもんだね。

美人はこうでなくっちゃな。繊細でなくても良いが、やっぱり、人が死ぬを見たら胸を痛めるべきだぜ。頬を赤く染めるなんて以ての外だ。男らしく慰めてやるどころか、むしろこっちが慰めて欲しくなるよな。あー、ランシエ嬢、良いなあ。俺も慰めてくれねえかな。

「お辛い目に合われましたね。ですがもう大丈夫です」

赤毛は憂い顔で微笑むと、お姫様の手を自分の両手でそっと握り込んだ。

「私どもが必ず、お二方をアルテまで無事に送り届けて見せます。この命に代えまして」

すっげーカリスマ。

お姫様はもとより、警戒心丸出しだったランシエ嬢でさえも、微笑む赤毛に一瞬見とれていたよ。とても十歳そこのガキの台詞とは思えねえ。瞳で捕まえて言葉で落とす。はは、ジゴロでもここまでするよ。はいかねえよ。一体誰に教わったのかね。

「それは願ってもない申し出ですが、本当によろしいのですか？」

私はアルテの第二王女という立場にありますが、このように世上が不安定になってしまいましたら、旅に役立つような力はありません。賊が屋敷を去ってから慌てて飛び出してきたので、換金できそうなものも持っていますし、足手まといにしかならないと……」

「リリーナ様。どうかそのようなお気遣いなさらないで下さい。私は困っている人を見たら助けよと教わっております。失礼ですが、例えばリリーナ様が私どもと同じような庶民であったとしても、私の意志に変わりはございません。人に尽くす事以上の幸せはございませんもの」

「なんと……」

お姫様は大切に育てられてきたんだろうな。赤毛の齒の浮くような台詞に、感極まったように顔を赤く染めた。しかしまあ、ランシエ嬢はさすがに世間を知っていたらしい、苦り切った顔で赤毛と主人を見比べた。そしてなぜか最後に俺を睨んだ。まさか俺にどうにかしろってか？ おいおい、買いかぶらないでくれ。俺に出来るのは息を吸って吐くことくらいさ。タイミングが結構難しいんだぜ。なんならあんたにもコツを教えてやろうか？

そうやって俺が微笑みかけると、ランシエ嬢、小さく鼻を鳴らして綺麗な灰色の瞳を逸らしたよ。さもありなんって感じだったけど、俺はハンカチを噛みたくなった。本当に持っているのかなんて野暮な事は聞くなよ。俺があんたに言える事は一つだ、トイレから出てきた時の俺の前髪はちよつと濡れている。

しかしまあ、どうして俺は好みの女には嫌われ、絶対に近寄りたくない女に仲良くされちまうんだろ。清廉潔白に生きてきたはずなのになあ。ん、何だその顔は。自慢じゃないがこの俺は、道理に反した事は生まれてこの方ただの一度もした事はねえんだ。

その道理って何だ、だと……？

んなもん決まってるんだろ。人の見てるところで悪い事はすんな、人の見てないところでやれ、だよ。俺の世代はみんなそう教わったもんさ。まあしかし、時代は変わっちゃったんだ。この間さ、親子連れの横をたまたま通りかかった事があったんだけど。どういう話の流れかは知らねえが、まだまだ若い母親が五歳くらいのガキに真面目な顔でこう言い聞かせてたんだよ。

人の嫌がる事を率先してやりなさい、ってさ。

ああ、ひでえひでえ。

あの母親、どこにでもいそうな女に見えたが、実際はともんでもねえ悪党だったんだ。しかもガキにまでそれを徹底させようとしてんだ、さすがの俺もその時ばかりは天を仰いだぜ。

ああでも、頷いたガキが母親のスカートを勢いよく捲り上げた時は、品の良い下着に包まれたキュツと引き締まった尻の方に目を向けたけどな。

なんでえ、あの母親。結構イイコト教えてんじゃねえかよ。

「ありがとうございます。先ほど助けていただいたことも含め、このご恩は必ずお返しします」

「ふふ、気にしなくても良いのに……それでは、すぐにもこの街から脱出しましょうか。長居は危険です。ですが、どうぞご安心下さい。私の護衛は腕が立ちますので」

六つの瞳が俺を見た。

咄嗟に顔を逸らしかけたが、見慣れた青いやつがそれを許しちゃくれなかった。俺は仕方なく、無言で重々しく頷いてやった。だが結局はそれが良かったのかも。ランシェ嬢は顔をしかめたが、お姫様の方は頼もしそうに顔を綻ばせてくれたよ。きっと無口な渋め

のいい男に見えたんだろうな……だがまあ、実際はさ、口を開くと本音が出そうで怖かっただけなのよ。

あんたら、引き返すなら今が最後だぞ——ってな。

ともあれ、旅の仲間もとい、旅の犠牲者が二人追加になったわけだ。

美少女の皮被った赤毛の悪魔。

眺める分には申し分ないが、一緒に旅をするには最悪の、人畜無害なお姫様。

一番まともだが、どうやら俺を敵として認識しまったらしい美人侍女。

滅多にお目にかかれない綺麗どころが集まってるんだ、傍から見れば俺は樂園にいるようにも思えるだろう。だがまあ実際は、俺は熱したフライパンの上を裸足で踊らされているわけだ。それでもこれが樂園だと言うのなら、俺は地獄の方を選ばせてもらうぜ。

はは、まあいいや。

俺は結局とことん振り回される運命らしいから、諦めて受け入れてやるよ。

でもな、このいかれたパーティーに、これ以上のメンツが増える事は、さすがの俺の勘弁して欲しいと思っちゃまうよ。何しろ全部が全部、この俺の双肩にデーンと乗っかるわけだからな。なで肩になっちまったらどうすんだよ畜生。

「さあ、行きましようか。グーデル、務めを果たしなさい」

赤毛の覇気に満ちた声に、俺はこれで見納めとなるらしいサウダルーデの空を仰いだ。もうすぐ昼になろうかったくらいのそれは、ああ、目に痛いくらい青かったよ。

俺は視線を下ろし、空以上に青い赤毛の瞳を見つめた。

「かしこまりましたさ」

第十七話

つーわけで、行き先はジョジーニャじゃなくなった。

あのアマに会わなくてすむってのは、正直ありがたい。が、ほっと一安心出来るかっていうと、もちろんそうじゃない。お荷物二つ爆弾一つぶらさげて、賊も出るっていう荒野を遠い遠いアルテ公国目指して突っ切って行くんだぜ？ その上何しに行くかって言うと、「早い話が乗っ取りですね。裏で糸を引いて、アルテそのものを帝国と戦うための駒にするのです」

……だ。

憂鬱になるなって方がおかしい。

だが、俺に拒否権は存在しないわけだから、行かないっていう選択肢はない。

ひどい話さ。

ひどいが、仕方ない。俺は今まで通りテメエを生かすために四苦八苦するだけさ。赤毛を人と思わず、人型をした天災だと思えば楽になる。まあ、か弱い天災を守るってのも結構変な話だな。

ともあれ、現実的な話をしよう。

行き先がジョジーニャからアルテに変わったとは言え、馬はどうしたって必要になる。ってなわけで俺たちは当初の計画通り、サウダルーデを出た後そそくさと騎馬民族の集落がある丘陵へと向かった。大した道のりじゃない。盗賊だの何だのに警戒しながらゆっくり進んでも、一日とちよつとで集落のテント群が見えてきた。ただ、他の三人はともかく、俺はこちらに走り寄ってきた馬の姿を見たとき、膝から崩れ落ちそうな勢いで疲れ果てていた。

「ベイン！ 久しぶりだな、元気して……いや、ひどい顔だな。一体どうしたんだ？」

馬に乗った男は見覚えがあった。

テッシュム・ベルモウ。

外見はただのマツチョな中年野郎だが、騎馬民族——ゲータ
イ族のナンバーツーという結構な身分だ。ゲータの男は馬術、
格闘、そして音楽の腕によって上下関係が決まるからよ、テッ
シムもごつい見かけによらず、歌も上手けりや楽器も扱えるんだ。一
度歌の方を聞かせて貰ったことがあるが、ああ、酒場で婆が上げる
悲鳴よりも何倍も良かったぜ。出来れば俺のやさぐれた心を癒すよ
うなやつを一つ、今すぐ歌って欲しいところだ。

「……久しぶりだな、テッシュム。三年ぶりくらいか」

「ああ、そんなとこだな。それよりどうした、目が死んでるぞお前」

「ん？ ああ、後ろのアマ—— お嬢様方がな、ちよつと頭がオ
イカレになっけいらっしやってな……」

「……まあ、何だ。取りあえず俺のテントまで案内しよう」

「助かる」

「後ろの方々も、さあ」

テッシュムは日に焼けた顔に人なつっこい笑みを浮かべ、俺の後
ろに声をかけた。俺は振り向くつもりは欠片もなかったが……何だ
ろうな、ひよつとすると俺が今まで見てきたのがただの悪夢で、振
り返ればそこに本物の現実の姿があるんじゃないかねえかと無意識に期待
しちまったんだ。だがまあ、世の中そんなうまい話はねえ。振り向
いた俺は結局、期待の燃えかすをため息と一緒に口から吐き出した。
寄り添う赤毛と金髪。

ああ、寄り添うなんて生温いもんじゃねえな。絡み合う赤と金。
それだよ、それ。腕を絡ませ視線を絡ませ、肌を重ねて熱を交わす。
まさに異常、この世の終わり。キャッキャウフフ。俺の疲労の原因
さ。

赤毛はな。

赤毛はな——凄かったぞ。

そりゃあサウダルーデでの？つかみ？もジゴロ級だったが、ここ

まで来る一日ちよつとの時間の中でも、ああ、完璧を越えて究極だったね。でもな、そんなに特殊なことをやったわけじゃないんだぜ。話をしたり手を繋いだりな、何でもないのでふつと笑いかけたりな、言つてしまえばそれくらいだよ。今じゃほら、アルテのお姫様はこの有様だ。

んー、そうだな。

あんた、ジゴロと詐欺師、それに為政者の技術つてのが結構似てる事は知ってるか？

人を虜にするって目的を遂行するために、連中はあの手この手で相手を籠絡する。その主力になるのはもちろん言葉だ。俺らが使えばただの音の羅列でしかないそれも連中が使えば魔法と同じさ。第三者には信じられないほどの効果を発揮する。

え？

嘘くさいって？

おいおい、そりゃあねえだろ。

あんた、他人の言う事は聞かなくても、身内の言う事には割と素直に従うだろ。ああ、思春期のガキは例外だぜ？ 毛が生えてくる頃は色々と敏感になってるからよ。でも、鬱蒼と生い茂っちまえば家族や親しい友人の言葉つてのは千金の価値を持つ。それは解るな？ 詐欺師もジゴロも他人を食い物にする。だからまあ当然の話だが、最初の段階じゃカモは言う事聞いてくれねえんだ。他人の言う事だから、だよ。だから他人じゃなくなっちまえば良い。

じゃあどうするか。

彼に信じさせるには、まず彼を信じよ——なんて宗教じみた話じゃない。連中が使う話術の本質つてのは、カモから冷静な判断力を奪うって点にある。解りやすく言えば「私はお前よりもお前の事を理解している。私が言う通りに行動すれば、お前は幸せになれる」って感じかな。肝になるのは？ 理解？の部分だ。優秀な詐欺師ほど下調べには手を抜かない。正気を疑うくらいにカモについて調べ上げる。それこそ本人以上に、だ。自分の内側にそいつのイメージを

精密に作り上げた上で、偶然を装って接触する。軽い会話を重ね、警戒心を解き、優しい言葉をかけ、頷いてやる。そして次第に思考をコントロールしていく。

？相手を読む？

赤毛はその能力に長けていた。

下調べなしでも、会話をいくつか重ねるだけで相手の心を分析出来るほどにな。姫様は読まれちゃったわけだ。それで判断力を奪われたんだ。

姫様と赤毛。

見かけから言えば姉と妹か、下手をすると母と娘の構図だろ？

でもな、赤毛を見る姫様の目つきは始終潤んでるわけよ。自分より低い背丈のやつと腕組んでるのに、まるで縋り付いているように見えるんだ。しかし実際は見かけよりも中身の方がひどい有様なんだよ。だからこそ姫様はこうしてテッシュムが目の前にいても、赤毛の顔しか見てないんだ。他の何も目に入らないんだろうな。箱入りの世間知らずってことで、元から素養は十分にあつたわけだが、赤毛に完全に開拓されちゃってるらしい。心が奴隷になっちゃったんだな。

まあ良いさ。

俺は別に姫様がどの道に走ろうが盛大にこけようがどうでも良い。だが、目の前でそのおぞましいイチャツキを見せられりゃあ、俺の具合は真つ逆さまに悪くなってるっていったよ。それも俺だけじゃないんだ。ランシエ嬢だってそうさ。可哀想にな、主人が年端もねえメスガキに籠絡されるのを見せ続けられてなあ……いつそのことこつちはこつちでヨロシクやらねえかって目で合図してみたんだが、はは、無理だったよ。スゲエ目してな、俺を睨むんだよ。しっかしあの懐に入れた手は何を掴んでたんだろうなあ。ゴツゴツしてたけど、まさか乳じゃないだろうし……。

「ありがとうございます。テッシュム様、でよろしかったでしょう
か」

「ええ、そうです。様はいりませんよ、お嬢さん」

「いえ、そういうわけにもいきませんわ。ああ、名乗るのが遅れて申し訳ありません。私はそのベインの現主、フィオナ・セリアードと申します。こちらは私の友人のリリイ、そしてその従者であるランシエです。宜しく願います」

「ああ、これはご丁寧にどうも。私はテッシュム・ベルモウと言います。この集落では族長の補佐をしてるもんです。立ち話も何ですので、さ、こちらにどうぞ」

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきますわ」

俺が現実を呪っている間に話は終わったらしい。テッシュムは歩き出し、ついでに目線で俺に合図を送ってきた。俺は考えるのも億劫だったので素直にそれに従い、馬から下りて歩くテッシュムの隣に並んだ。

「……おい。お前一体どうなってるんだ？」

小声で話しかけてきたテッシュムの顔は、全く訳が解らないといった感じだった。そりゃそうだろう。何しろ三年ぶりにやってきた知り合いが、如何にも貴族といった身なりの女を複数連れ、その上一番年長の女は一番年下の女に完璧に入れ込んでしまってるんだからな。俺なら迷わず背を向けて逃げ出すね。テッシュムは情に厚いからそんな事はしねえけど。

「何がどうなってる、か。俺にも良く解らんよ、実は」

「は？ そんな馬鹿な話があるか。だってお前、あのちっちゃい子、お前の主って言ってたじゃないか。違うのか？」

「残念ながら違わない。それについてはあんまり聞くな。お前も巻き込まれる……というか、可能な限り俺たちには関わるな。悲しいことになるぞ」

「自分の方から来ておいてそれかよ……まあ良い。要件は馬か？」

テッシュムは眉根を寄せたが、周辺都市との交易責任者を任されているだけあって切り替えは早かった。俺は久しぶりの真つ当な会話に幾分気分がマシになった。ほんと、女はろくなもんじゃない。

「ああ。長旅になるから出来るだけ丈夫なやつを頼む。あと、食料も持っていけるだけ欲しいんだが」

「ふむ。急いでるみたいだし、明日の昼には用意しよう」

「ありがたい。支払いはどうする？ 貴金属もあるが、こいつみたいな雑貨品もあるが」

俺は担いでいた二つのリュックの口を開け中身を披露した。テッシュムはそれを素早く物色した後、何度か頷いた。

「貴金属は少しで良い。こっちの比重を多めにしよう。この状況じゃ現物の方が役に立つからな」

「戦争だからな……これからゲータイはどうするんだ？」

軽い感じで尋ねたのだが、返ってきたのは重々しいため息だった。「それが悩みどころなんだよ。長老どもは戦火の及ばない場所に避難しろって言うし、若造どもは参戦してゲータイの名を高めるとか言うしなあ……」

「族長——サエボルは何て？」

テッシュムより少し年上のサエボルは、深い目をした慎重な男。少々無口なところがあるが、その反面一言一言は重く、仲間からの信頼は厚い。このひねくれ者の俺ですら信用できるような立派な男だ。あいつのことだから軽はずみな判断はしないと思うが。

「長老派に近いな。まあ、俺もそうだけど。でもな、実際そいつは理想であって現実的な話じゃないんだ。下手すりゃ大陸中が戦争になるし、大体何がどうなっているか解らんし。お前は知らないか？ サウダルーデで何があったか」

「いんや。俺もさっぱりだ。慌てて逃げてきたよ」

大使館で見たものについては黙っておく。理由はあるようでない。ただ、そいつについて喋ると、この人の良い男やゲータイ族そのものがまずい事になりそうな気がしたのだ。何しろ俺が足を踏み入れているのは戦争よりも厄介なものだ。他人を巻き添えにして喜ぶ趣味は俺にはない。

「そうか……。はあ、まあ良いさ。何が解ったところで俺たちは風

に舞う木の葉だからな。流れに身を任せるしかないだろうよ」

「ああ、すげえ解るぜ。行きたい場所には行けねえんだよなあ……」

男して二人ため息をつく。

全く、真面目なやつほど損をする。

異論はなしだ馬鹿野郎。

族民達のテント群を抜け、一際大きいテッシュムの天幕へと辿り着いた俺は、面倒な上に目障りな女どもをこれ幸いと天幕に放り込み、近くのゲータイの男達に手伝ってもらいながら今夜寝泊まりするための小さなテントを一つ建てた。身体を休めたのと時を同じくして日が沈み、俺たちはテッシュムの家族に歓待されながら夕食を取った。久しぶりに団らんを味わった。人様のものだが悲しいほどに心にしみる。テッシュムにきつい酒を注がれながら、俺は心で泣いて顔で泣いた。

楽しくも短く感じる夕餉が終わり、俺たちは自分たちのテントの中へと引き上げた。

そうテントも真実も一つ。

女三人とただれた夜の一時……は、もちろんあり得ないし俺もゴメンさ。女どもが寝息をたてるテントの外、俺はたき火を前に椅子に腰掛け、孤独なる見張りを続けた。テッシュムの差し入れの酒やつまみやらを口に放り込みながら、俺は頭の中で赤毛を泣かせる妄想をしていた。しかしこいつが全く上手くいかなくて苦勞するんだ。むしろなぜだか俺の方が泣かされちまう。へへ、現実逃避どころか妄想からも逃げなくちゃならんとはな。オヤジ、俺はもしかしたら今地獄にいるのかも知れん――。

負け犬の俺は夜空の星を見上げ、やけくそにウイंकをかました。

俺の顔面に矢が突き刺さったのは、その次の瞬間の事だった。

第十八話

矢の刺さった顔面の皮——もとい、咄嗟に突き出した干し肉を投げ捨て、俺は地面を転がった。

甲高い風切り音が鳴り響き、先ほどまで立っていた場所に新しい矢が突き刺さる。俺は回転を止めぬまま近くのテントの影に飛び込み、矢が飛んでこなくなったのを確認して中腰になった。

最低だ。

俺は短くない時間あそこで飲み食いしてたんだぜ？

そりゃあ緊張しまくってたってわけじゃないが、こっちも見張りをやってたんだ、それなりに警戒はしていた。

しかし、今しがた矢を打ち込んできた野郎の気配を俺は一度も感じちゃいない——いや、今なお感じてないんだよ。これがどんだけえらい事だか、あんた解るか？

普通よ、矢で得物を射るって行為にはかなりの行程が必要なんだよ。

矢の当たる距離まで近づき、弓を構え矢をつがえ、標的の動きをみながら狙いを定め、風が一番弱くなった瞬間に矢尻から指を放す。これが暗殺とか狩りとか、相手に気づかれちゃまずい場合はもつと大変だ。どの行程が一番難しいのはあんたにだって解るだろう？ そつ、一番最初だよ。相手に気づかれぬ距離まで近づく……これが狩りの肝なんだ。

人は動く時に色んな音をたてる。

足音は最たるもんだし、呼吸に衣擦れなんてのもある。こいつを全て抑えたうえで、気配を殺さなきゃならん。音を消すのは割と簡単だが、後者は難しいんだ。何しろ標的には勘が鋭いやつも鈍いやつもいる。肉食う獣よりも草食うやつの方が敏感だし、町民よりも兵士の方が鋭い。

それじゃあ臆病な俺はどうかって言うと、自慢じゃないがかなり

のもんだ。人通りの多い町の中で歩いていて、後ろから誰かに見られていても気づく。視線つてのは俺にとっちゃ結構痛いもんなんだ。相手が殺意を持った刺客なら言わずもがなだ。

早い話、矢が飛んでくるまで敵の存在に気づかなかったのは人生初めての事だったわけよ。あんまり驚きすぎて思わずアレが硬く――いや、違った。縮んじまったよ、うん。

あー、しかし相手は誰だよ。

真っ先に思い浮かんだ顔は赤毛を襲った帽子野郎のそれだが、何だろう、どうも違うような気がする。理由は何だって聞かれりゃあ上手くは答えられないけどよ。やつこさんは確かにべらぼうに強いんだが、その強さの質が違う気がするんだ。帽子野郎は例えるなら狼だ。強靱な身体と鋭い牙。効率を重視するから背後から襲ったりもするだろうが、その時は確実に一撃で仕留めてくるだろう。やつの握った剣にはそういった凶暴な自信がうかがえた。

だが、この弓使いはそれとは違う。野郎が狼ならこいつはフクロウだ。猛禽でも鷹とは違う。ふわりと宙を舞い、無音で獲物に近づきゴキリと首をへし折る。荒々しさとは無縁の純粹なるハンターだ。今なおこうして沈黙を保っているところもそれだ。帽子野郎なら初撃を外した時点で撤収するだろう。狼は凶暴だがその一方で非常に賢い。無駄はせずに次の機会に備える。しかし、この弓使いはどうだ？ 初撃を外した後、俺がここに来るまで二本の矢を放った。夜、動く標的に矢を命中させることは達人でも難しい。まして相手が干し肉で矢をかわすような手練れ中の手練れ、しかも最高に渋い男――何？ 誰のことだか解らない？ 馬鹿野郎、俺に決まってるだろ、俺――であれば、連射は控えるだろう。矢の無駄以外のなにものでもない。賢いやつなら二矢目を放たず逃亡、あるいは素早く場所を変えてもう一度狙撃。接近戦もいけるくちなら剣を抜いても良いだろう。

そしてこれもカンでしかないが……やつこさん、まだ近くにいます。気配は相変わらずだが、空気が嫌な具合にざらついている。どこ

かに身を潜め、俺が動くのを待っているんだろう。

さて、どうしたものか。

刺客がどういう性格をしているか分析した上で知略を駆使した頭脳戦をやっても良いが、状況は俺の方が悪い。何しろ俺は今現在？傭兵？ではなく？護衛？だ。もし弓使いが女達がぐーすかやってるテントに狙いを変えればアウトだ。刺客が複数の場合もありうる。

じっとしている時間の分だけ状況はまずい方に転がっていくわけだ。こちらから打って出るしかない。

俺はそう結論付けるとすぐに手近な石を拾い集め、ポケットに突っ込んだ。そして石の一つを適当な方角に大きく放り投げると、テントの影から飛び出した。

俺の予想は的中していたことはすぐに解った。

放り投げた石がどこかに落下し小さな音を立てるよりも早く、視界の隅から小さな点が飛んできた。弓使いは依然としてそこにあり、そして俺の動きにすぐさま反応して見せたその技量は一流のものだった。相手が俺じゃなけりや今頃帰還の途についていたことだろうよ。

しかしまあ、俺もそこそこだ。

一直線に自分に向かってきた矢を見るやいなや、俺はがくと身を伏せた。地面すれすれまでかがんだ俺の頭の上を、矢が舌打ちしながら通り過ぎる。この動きは反射的なもんじゃない。狙ったもんだ。テントから飛び出す時、俺はわざと背筋をぴんと伸ばし、敵が狙いやすくしたのさ。走るのも全力じゃない。いつでも身体を伏せられるように重心を前に倒さず、全身から力を抜いていた。弓使いつてのは基本的に胴から上を狙うから、頭を低くすればなかなか中らない。もし腰下を狙われていても、身をかめた状態であれば首筋なんかの急所は肩や腕で隠せる。まあ、背中の中ればおしまいだけだな。

賭の一つさ。

んで、一応俺の勝ち。

だがまあ、俺が不利であることに変わりはない。何しろこの体勢だとすぐには動けない。射手が冷静なら二射目でけりをつけられるわけさ。

俺はこの時初めて弓を引き絞る小さな音を聞いた。

弓使いが焦ったんだ。

それはもちろん千載一遇のチャンスが訪れたからであり、そして自分の居場所を知られるという最大の危険が訪れたからだ。急がなければ全てがふいになる——その動揺が音になったんだよ。こいつ、やっぱり帽子野郎とは違う。やつよりも格下だ。

俺は笑った。

笑いながら両手に握った石達を、身をかがめたまま、射手が潜んでいる暗闇の中に鋭く放り投げた。小さな石ころには殺傷能力はない。だが、小さくて軽いからこそ速く、そして大量に放つことが出来る。狙いは弓使いに傷を負わせることじゃない。野郎の気を逸らすことだ。

石を投擲した俺が両足に力を込め、立ち上がるうとしたその時、二矢目が風を切り裂きながら飛んできた。しかし、今回のそれはこれまでのやつほど狙いがシャープじゃなかった。左の太もものあたりまで飛んできたそれを俺は余裕を持ってかわし、ポケットから新たな石を取り出しながら全力で駆けだした。もちろん、真っ直ぐ敵に向かうなんて馬鹿なことはいらない。斜めに角度をつけて、だ。弓使いが一番嫌う動き方だよ。

三矢目が飛んでくる。

が、これもやはり焦ってる。

もはや初撃のような一流の技術は影も形もない。ガキが手製の弓で木の的を狙ったような具合だ。矢を直接手でもって突き刺した方がマシだろうぜ。

身を捻ることもなく、ただ走り続けただけで矢をかわした俺は、やがて弓使いの姿を捉えた。

女だった。どこにでもいるような、色あせた黒髪とそれと同じ目

をした二十歳過ぎの女だ。中腰で弓を構えたまま、俺の顔を見ても
気配のほとんどを隠してるとこは大したもんだったが、矢筒から矢
を引き抜くその指は焦燥に濡れていた。俺は鼻で笑い、女が腰の短
剣を引き抜く前に手の中の小石を投げつけた。

「っ！」

石に顔を弾かれた女は反射的に動きを止めた。

そしてそれは、俺のような格好いい手練れの傭兵さんの前で見せ
ちゃいけない隙だったわけだ。

「ほらよっ！」

突進の勢いを利用した俺の蹴りが女の胸に突き刺さる。女は景気
よく後ろに吹っ飛び、愉快に地面を転がった。俺は素早く間合いを
詰め、胸を押さえて咳き込む女の膝をブーツのかかとで踏み抜いた。
骨の碎ける鈍い音が伝わってくる。

しかし女は身を大きく震わせたものの、悲鳴は一つも上げなかつ
た。暗殺者のかみだねえと頷きながら、俺はもう一つの膝を踏み
抜いた。そして女が放り出した弓を手に取り、びくびくと身をくね
らせる女の上にのしかかった。無理矢理口を開かせると、そこに弓
を咥えさせ、弦をくるくると巻き付けて即席の猿ぐつわをつくった。
舌を噛ませないためだ。これほどの暗殺者相手に情報が聞き出せる
とは思えないが、赤毛に見せれば何か解ることもあるかも知れない。
俺はそう思ったわけだ。

「ほう……美人じゃないが、不細工でもないな。身体は鍛えてるだ
ろうし……ふむ」

俺は人民の行く末を考える道德者のような顔をして思案を重ねた。

女の暗殺者。

何をしてる罪には問われない。

赤毛のお陰で最近すっかりご無沙汰だ。

——大体解るだろう？

「へへっ、痛みはともかく、快樂に対しても無言でいられるかな……

……？」

などと突然現れたヒーローにぼっこぼこにされそうなチンプイラのような台詞を吐いた俺は、のりのりで女の服に手をかけた。乳首の色、乳輪の直径についての解を導こうと精神状態を賢者の領域まで押し上げつつあった俺は、しかし女が突然ぶるぶると痙攣し始めたことに気づき、強制的に人間の領域まで帰還させられることとなった。

「ちよつ、まさか薬飲んできたの！？ この馬鹿！ もっと身体を大切にしろよ畜生！」

暗殺失敗時、身体を自由を奪われるなどして自殺を選べなくなった時のために、あらかじめ仕事の前に毒薬を飲んでおくやつもいる。仕事を終えた時のみ解毒剤を飲むことで機密を保持する仕組みだ。女はどうやらそうだった暗殺者の一人だったらしい。白目をむき、口にくわえた弓の隙間から泡を零す女は、数秒足らずで絶命した。俺は久しぶりの活躍の予感に血をたぎらせていた相棒に首を振った。

——なあ、どうしたんだベイン！ 敵の姿が見えないぞ、早く支持をくれ！

——終わっただんだ。終わっちまったんだよバディ。俺達の戦争は、始まる前に終わっちまったんだ……。

「畜生」

俺達は毒づいた。

相棒はため息をついて眠りについたが、俺はもしかと思って死んだ女の身体をまさぐった。

おい。

あんたひよつとすると俺をカスだと思ってやしないか。

俺はクズだ。それは認めるよ。だが、死体に手出すほどアレじゃねえぞ。んな狂ったことするくらいなら、俺はむしろモグラの穴にでも腰を振るさ。俺にだって分別はある。ホントだぜ？ この間商人からたくさん買ったんだ。何なら今ここで見せてやっても良いくらいだ……。

まあとにかく、俺は別に女の身体に用があつたわけじゃない。俺

が探したのは解毒剤の入った容器さ。何しろそれがなくちゃ暗殺が成功しても自分まで死んじまうからな。

「……ねえな。何も持ってねえ」

しかし、女は解毒剤を持っていなかった。

死亡時に様々な情報を知られることを避けるために、暗殺者がものを出来るだけ持ち歩かないことは普通だ。解毒剤も、もしかしたらどこか近くの拠点に隠してあるのかも知れない。だが、解毒剤を持っていない理由はもう一つばかり考えられる。

「脅されてたのか？ 毒を飲まされた状態で放たれ、暗殺成功の証拠を持ち帰った時に解毒剤を渡される——」

女は初撃を外した後、その場に居続けた。接近戦が出来ない弓使いが最高の攻撃を外されたんだ。無理して留まり続けるのはリスクが上がるだけ。普通はその場を離脱し、次のチャンスを待つ。あの腕前なら、状況が変われば一撃で俺を仕留めることだって可能だっただろう。

焦っていた。

そう考えると、あの無茶な行動も理解できる。崖っぷちだったのはむしろこの女の方じゃなかったのか？ 俺は待ち続ければ自分の状況が悪くなると考えていたが、もしかすると違ったのかも知れない。ひよっとするとあのまま待ち続けていれば、この女の方が先に動いたかも知れない……。

俺は死体となった暗殺者を見下ろしたまま、眉間に皺を寄せた。

女を送り込んだやつは、腕利きの暗殺者を使い捨てなければならないと判断したわけだ。

それはつまり、赤毛の目的——十歳ちよつとの小娘が帝国を滅ぼすことが可能であると、そう思っているわけだ。しかし、赤毛が如何なる情報を持ち、如何なる人脈を持っていたにせよ、普通はそんなことが出来うるとは誰も思わないだろう。何しろ相手はあの帝国なのだから。

俺はふと、赤毛を殺さんと目論む誰かについて考えた。

ひよつとするとその誰かさん、赤毛が所有する付加価値を恐れているのではなく、人格や精神といった赤毛そのもの恐れているのではないか。俺も赤毛は怖いし、やばい女だとは思っているが、帝国を滅ぼせるほどの人物とは思っていない。しかし、もし俺の推測が当たっていれば、その誰かさんとやらは赤毛のことを深く知っているとということになる。それはつまり、付き合いの長い親や兄弟といった人物を指すわけだが……。

はてはて。赤毛を殺そうとしているのは一体誰なんだ――？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3120j/>

パラダイス・パラノイア

2010年10月8日11時53分発行